
気づかれぬままに神性の交換が行われた

へげぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気づかれぬままに神性の交換が行われた

【Nコード】

N6603S

【作者名】

へげぞ

【あらすじ】

ごく普通の平凡な高校生が異世界に召還される。召還した女の子から救世主と呼ばれるのだが。

1 (前書き)

あとさき考えず、ぼんやりとした構想のまま、気ままに書いていき
たいと思います。

おれは平凡な高校生。何の目的もなく学校に通っていた。おれについて、特に詳しく説明するようなことは何もない。

家族構成は、父親、母親、おれ、妹だ。妹は中学三年生になる。

高校一年の六月のある日、おれは学校に向かってるところだった。部活はサッカー部に入っている。朝練をサボって、のんびり通学していた。

「あれ？」

いつもの日常、いつもの街並みのはずだった。家が建ち並び、道路を自動車が走り、空は青く晴れているはずだった。それなのに、いつの間にか、周りの風景が消えた。周りの風景が真っ白になったのだ。

おれはどうしたんだ。何が起こったんだ。こんなこと、普通であるはずがない。こんなことが日常のはずがない。絶対に何か異変が起きたんだ。そうでなければ、説明がつかない。

そう思って、おれが

「誰かあ。助けてくれえ」

と叫んだ時、世界は暗転した。

「助けてほしいのは、めかけの方なのです」

気がつくと、石造りの神殿の中にいた。真っ暗な中で、たいまつが周りを照らしている。神殿の中がなんとか見えるくらいだ。

そこは、二十一世紀の日本とはとても思えなかった。まるで、古代ローマの遺跡のような神殿だった。

そこに、透き通るような黒髪の女の子がいた。

「おまえが、おれを呼んだのか？」

おれが不思議そうに訪ねると、

「そうです。めかけがあなたさまを召喚しました」

と女の子は答えた。

「何のためにおれを。それにどうやって」

頭が混乱するおれに、女の子は説明する。

「めかけたちは今にも死にそうなのです。めかけたちの一族は滅ぼされてしまいそうなのです。それで、めかけが救世主を召喚しました」

救世主？ それって、ひょっとして、おれのことじゃないか。この女の子、おれに救ってもらえるとも思ってるんじゃないのか？ 「はいはい、そこまでしておきな。低級妖魔さんよ。こら、リーゼ、あなた、いい加減にしなさい。こんな低級妖魔が救世主なわけがないでしょう。あなたに世界を救う力なんてありません。早く、この低級妖魔を元の場所へ返しなさい。いつ、ベアウルフが襲ってくるかわからないのに」

三十歳くらいの女の子が、リーゼと呼ばれた女の子をたしなめた。なんだか、わからないが、おれは救世主と呼ばれた次の瞬間に、低級妖魔と呼ばれている。

「大丈夫なのです。このお方がめかけたちを救ってくれるのです」「何が救世主を召喚するよ。そんな大魔術があなたに使えるわけがないでしょ。この男はどうせ低級妖魔よ。暴れだす前に、消し去りなさい。いいですか、これは命令です」

おれを低級妖魔呼びわりする女がリーゼを叱っている。

「そうだ、そうだ。その男は低級妖魔に決まっている」

神殿の入口の方から大勢の男の声が出た。この神殿に集まって何をしているんだろう。それより、立派な人類であるおれをつかまえて、低級妖魔呼びわりするとはどういうことだ。

「リーゼといったな。きみがおれを魔法でここに召喚したのか」

おれが女の子に聞くと、

「そうです。めかけは救世主であるあなたさまを召喚したのです」と答えた。

「召喚されてすぐに聞くのもなんだが、おれは元の世界にどうやっ

たら帰れるんだ」

リーゼは悲しそうな顔をした。

「それが、めかけの力では、呼び寄せることはできても、返すことはできないのです」

うむ。それはすぐくたいへんなことではないだろうか。

「おれは元の世界には戻れないのか」

「めかけの力では無理ですが、この世界のどこかに力のある魔道士がいるでしょうから、その人に頼めば帰れるかもしれないです」なるほど。

「それで、きみはいつたいおれに何をさせるために召還したんだ？
何から誰をどうやって救ってほしいんだ」

リーゼは悲しい声で笑って答えた。

「もうすぐ、この神殿にベアウルフが襲ってきます。めかけたちはみんな食べられてしまうでしょう。ベアウルフを退治してほしいのです」

怪物退治か。そんなこと、おれにできるだろうか。

「これが剣です。この神殿でいちばん丈夫な剣です」

リーゼはおれに剣を渡した。

おれは剣を受けとり、神殿の外に出た。ちょうど、ベアウルフが襲ってきたところだった。おれの身長より大きな狼が大きな口でおれを食べようとしている。

「あの低級妖魔、殺されるぞ。やばい、早く逃げるんだ」

男たちが逆方向に走り始めた。

「ほら、リーゼ、あんたも逃げるんだよ」

「めかけは逃げられません。救世主さまが守ってくれるので大丈夫なのです」

おれは、このままベアウルフに食い殺されるかもしれない。どうする。逃げるか、戦うか。

リーゼがこつちに走ってくる。

「ガールルルル」

ベアウルフが吠える。

おれは、剣をベアウルフに向けて振り下ろした。世界がつくりかえられるところだった。おれの攻撃は、世界を全能につくりかえる力があるかのような感じだった。ベアウルフが、ベシヤツと音を立てて、一撃で破裂した。

何だ？ この感覚は。

おれは自分がベアウルフに勝ったのが信じられなかった。

「どうということだ。なぜ、おれにこんな力がある？」

「めかけが思うに、あなたさまはこの世界の創造神と神性を交換されたのです」

何かなんだかわからなかった。

「おい、低級妖魔がベアウルフをやっつけたぞ」

「本当だ。信じられない」

「気をつける。低級妖魔はいつおれたちを襲ってくるかもわからない」

男たちが遠くからおれたちを見ていた。

おれはしばらく呆然としていたが、しばらくすると、男たちが石を投げてきた。なぜだ。低級妖魔のおれを追い払おうというのか。

「リーゼ。旅に出よう。おれはここでは望まれていない」

「はい。めかけはついていきます」

そして、おれとリーゼは神殿を離れた。

旅を始めて、すぐに気づいたことだが、この世界には怪物が多い。人は怪物に追いついてられ、食われ殺される運命にあるようだ。リーゼはおれにそれを救えといっているのだろうか。

「水も食料もない。それにできれば、おれは着替えたい」

おれはリーゼに頼んで、街で砂漠を旅する黒装束のようなマントに着替えさせてもらった。制服ではなんだか旅をする気になれない。服代を払ってもらったリーゼには本当に申し訳なく思っている。

リーゼのお金で水と食料を買い、旅支度を整えると、おれたち二人は当てもなく、魔道士を探す旅に出た。

「おれは元の世界に帰りたいし、おれを元の世界に帰すのは、きみの責任だ」

少々厳しいことをいったかもしれない。だが、リーゼは快く引き受けてくれた。

「めかけはあなたさまのものです」

そして、街を離れて、寂れた廃墟に差しかけたところだった。

一人の長身の金髪の女がいた。衣装が隠していてもわかるくらい丹念に作られた上等な衣服でできている。女の顔は傷だらけだった。寂しそうに一人にしている。

おれは、少し遠くから見ている。

金髪の女は、死んだ騎士が横たわっている隣に座り、祈っていた。なんだか、すごく寂しそうに見えた。

「救世主さま、あの人、可哀相に見える」

リーゼがいった。

「そうだな。何だが、困っているようだ」

おれたちは、金髪の女に近づき、話しかけた。

「ねえ、どうしたんだい？」

金髪の女は無言だった。

「きみの知り合いが死んだのか？」

横たわる騎士の死体の話を出されて、ようやく、金髪の女はおれたちに関心をもったようだった。すごく、寂しそうに見えた。

「そうだ。死んだのだ。わらわのために」

一瞬、ことばに詰まった。人の死を前にして、かけてあげられることばは少ない。

「おれたちも祈ろう。その騎士の冥福を」

「ありがとう」

金髪の女はかすかに微笑んで頭を下げた。

おれとリーゼが祈りを捧げていると、というか、リーゼの祈りはなんだか、呪術師の祈祷のような呪文を唱えているのだけれど、おれは目を瞑って、南無阿弥陀仏と心の中で唱えた。死者の冥福の祈り方など、諸氏百派だ。

「大切な人だったのか」

と、おれが聞くと、女は困ったように答えた。

「わらわに仕えてくれた最後の騎士だった。わらわは、亡国の暗君じゃ」

金髪の女はそういって、こちらを見た。目には涙が流れていた。

「困ったな、リーゼ。おれにはどうしたらいいかわからないよ」

すると、リーゼがぱつと明るい笑顔になって答えた。

「困っていることがあるなら、何でも、救世主さまにお願いすればいいのです。このお方が必ず救ってくれるでしょうから」

おいおい、リーゼのやつ、おれを買いかぶりすぎじゃないのか。

「救世主なのか、あなたは」

金髪の女に聞かれて、おれは困ってしまった。

「救世主のようでもあり、低級妖魔のようでもあり、だが、たぶん、おれはただのヒトだ」

「名前は何といたのだ？」

「まこと」

「まことか。わらわはロザミア。わらわのことは、まだ、話せない。

時がくれば、わらわが何者なのか打ち明けよう。それまで、わらわを守ってくれないか」

「やれやれ。用心棒として、一人守るも、二人守るも、同じようなものだ。」

「いいだろう。ロザミア。あなたの護衛をすることを誓おう」

「その剣にかけてか」

「うん？ こんな剣に誓いをかけて何の価値があるんだ？ だが、かまわないだろう。」

「ああ、この剣にかけて、誓うよ」

「ありがとう」

ロザミアは嬉しそうに微笑んだ。やっと、笑った。涙の跡はまだついている。

「ロザミア。きみの正体が何者であろうと、おれはきみを命をかけて守ることを誓うよ」

我ながら、口が軽いと思う。だが、おれは真剣だった。それくらいに、ロザミアが寂しそうに見えたのだ。

「救世主さまがいれば、なにもかも、大丈夫だよ」

リーゼはいう。

「五万人が死んだのだという。わらわは、最悪の無能ものじゃ。わらわほどの暗愚のものはおらぬ。わらわに仕える汝にも、苦勞をかけるだろう。その時は、許せ。最後には、ちゃんと打ち明けるから」

ロザミアはそういつていた。

「ねえ、リザードマンが襲ってくるみたいだよ」

リーゼがいった。リーゼの指さす方向を見ると、確かにワニの上半身をした半獣が襲ってくる。

おれは剣を抜いた。

「待て。わらわも手伝おう。足手まといかもしれないが」

ロザミアは腰から剣を抜いた。

「へえ、ロザミア、剣が使えるんだ」

「まあ、剣術では師範代の免許をもっている」

そして、おれとロザミアで、リザードマンに斬りかかった。ロザミアは、剣で牽制などをする。高度な技なのだろうが、おれにはちんぷんかんぷんだ。ロザミアがリザードマンの槍を受け止め、しのでいるうちに、おれが剣でリザードマンを斬りつけた。世界が変わったのだと思う。リザードマンは一撃で死んでいた。

あまりの簡単な勝利に、ロザミアの目が点になっていた。しばらく声も出せないくらい、呆然としている。

「どうしたんだ」

おれが聞くと、

「おぬし、強いのだな」

と褒められた。怪物退治をする分には、ためらいはないのだが、おれは、おれが殺したベアウルフやリザードマンが必ずしも悪者であつたとは思わない。この世界がどうなっているのかわからないが、これは人が生き残るための生存競争なのだろうか。ならば、仕方ない。

リーゼは無事だろうか。おれはふと後ろを見た。リーゼは杖を手にして、怖がっていた。

「めかけは救世主さまがいないと生きていけないのです」

リーゼはそんなことをいう。

おいおい、あまりおれに負担をかけるな。

「おれだって、万能じゃないんだよ」

おれがそういうと、リーゼは不思議そうに、

「あら、救世主さまにできないことはないはずですよ」と答えた。

2 (後書き)

まあ、最初の構想の範囲内です。そのうち、破綻しそうで怖いですがねえ。

3 (前書き)

これは、4月24日の分をまちがえて、一日早く投稿してしまった
ものです。よって、4月24日は更新がありません。

「力のある魔道士を探しているのですが」

リーゼがその声をかけても、満足に返事する者はいなかった。だいたい、魔道士なんてものがいることが不自然なのだ。一般人は魔道士の存在を知らない。おれが観察しているかぎり、この世界でも魔道士はあまり一般に広く存在を知られているわけではないようである。

魔道士の居場所など知らぬ、会ったこともない、と町人はリーゼを遠ざけた。

だが、おれは少なくとも、一人の魔道士の存在を知っている。それは、他でもない、異世界からおれを召喚したリーゼ自身である。

リーゼは魔道士だ。

「なんじゃと。この近くに領主の城があるのか」

同じように情報収集をしていたロザミアが何かに興味を持ったらしい。見知らぬおっさんと話している。

「ああ、領主の城はこのすぐ近くだよ。だが、近寄らない方がいい。魔族に占領されて、今は人が入り込める場所じゃない」

ぎりぎりどろろが歯を食いしばっている。

「ロザミア、領主の城に何か用があるのか」
とおれが聞くと、

「すまない。できれば、わらわは領主の城に行ってみたい。例えば、怪物の巣であろうとも」

「死ぬかもしれないよ」

おれが本音をいうと、

「かまわない。わらわはまだ生きてるのがおかしいのだ。自殺志願者の用心棒などを頼んで、まことに申し訳ないな」

「かまわないよ。おれも、この世界で一生を終えそうだし、おれに長生きする必要なんてないのさ。怪物の群れに突撃して死ぬという

のなら、付き合わないこともない」

「めかけも行くのです」

「リーゼ、きみは残っている。今回は本当に死にそうだ。きみまで死ぬことはない」

「めかけは救世主さまから離れるわけにはいきません。めかけはしつこいストーリーカーなのです」

「なら、三人で行くか。怪物に占領された領主の城に」

「巻き添えにして、本当にすまない」

そして、おれたちは、街の近くにある領主の城に入った。

入口にガーゴイルが見える。中には、何百匹のガーゴイルがたむろしているようだった。

「突撃するぞ」

ロザミアが勇んでいった。

「ああ。死ぬ前に言い残しておくことはないか？」

おれが聞くと、

「わらわが死んだら、お主たちは逃げ帰れ。わらわが先頭を行こう」

とロザミアが答えた。

「リーゼは、何か遺言がある？」

「めかけは救世主さまと一緒にいるだけで幸せなのです」

とリーゼが答えた。

そのまま、入口のガーゴイルにロザミアが突撃していった。ガキーンッ。ロザミアの剣をガーゴイルの爪が受け止める。二太刀、三太刀、ロザミアが剣を振るう。ガーゴイルがロザミアに噛み付こうとする。

後から走って追いついたおれが、ガーゴイルを一撃で仕留めた。

ベチャツとガーゴイルが死ぬ。世界が変わった感じがした。

「よし、このまま、奥まで行くぞ」

ロザミアが勢い込んで、叫んだ。そして、城の中に走り出す。中央の大廊下を走っていくと、大広間に出て、そこで、またロザミアと一匹のガーゴイルが戦い始めた。

「待つてください。めかけは速く走れないのです」

リーゼが後ろでてくてくと追いついてくる。全力ダッシュしていたロザミアにだいぶ、距離を開けられた感じた。

おれは、リーゼに近づいてきたガーゴイルを剣でしとめる。ベチヤ。世界が変わる感じ。

「おい、ロザミア、ガーゴイルの群れに囲まれたみたいだぞ」

おれは悲鳴をあげた。大広間に、何十匹のガーゴイルが集まってくる。

「粘れ。しのぎきれ。あきらめたら、命はない」

ロザミアは最初のガーゴイルを相手に剣を振るいながら、答えた。

「リーゼ、おれとロザミアの間にいる」

おれはリーゼに指示を出し、襲ってくるガーゴイルを一匹、一匹、仕留めていく。二匹、三匹、四匹、五匹。まだまだ、どんどん襲ってくる。倒しても倒してもきりがない。

「これは、本当にやばそうだぞ」

「このガーゴイル、手ごわいな。なかなかしぶとい」

まだ、最初の一匹目と戦っているロザミアがいった。その間に、おれは十匹、二十匹のガーゴイルを倒す。その度に、世界が変わる感じがした。ガーゴイルの襲撃は、収まる気配がない。三十匹、四十匹。数えるのが面倒くさくなってきた。

「きゃあ」

リーゼがガーゴイルに腕を引っかかれた。皮膚が裂け、血が流れる。

「このやろっ」

慌てて、リーゼに近づいたガーゴイルをやっつける。ベチヤ。世界が変わる。

八十匹、九十匹、百匹。まだ終わらない。

おれも疲れてきた。肩で息をしている。最終的に二百三十四匹のガーゴイルを仕留めた。

「そりゃあ」

ずぶつと音がして、ロザミアの剣がガーゴイルの腹に深く刺さった。

「はあはあ、大丈夫か、みんな」

ロザミアが振り向くと、辺りには二百匹のガーゴイルの死体があった。

呆然とするロザミア。

「これ、全部、まことが倒したのか？」

「ああ、そうだよ。これで、この城の怪物は全部、退治できたようだ」

見事に一匹のガーゴイルを倒したロザミアは、おれの頑張りを褒めてくれた。

「わらわはお主のような剣豪と旅ができて非常に嬉しく思う」

「まあな」

おれには、自分がどの程度凄いのかわからないのだが。

「救世主さまは無敵だよ」

リーゼがいう。

「それで、この城に何か用があったんじゃないのか、ロザミア」

「ああ、この城の者が残した痕跡を調べたのだが、どうやら、城を放棄して、領主もろとも、別の領地へ移ったようだ」

とロザミアがいった。

「この領主と知り合いなのか」

おれが聞くと、

「知らぬ。どこその下級貴族であろう。わらわとは縁もゆかりもない。ただ、舞踏会では知らずに会っているかもしれない」

「何かわかったのか」

「この領地も、奪われたままだということだな。それがわかっただけだ」

「何だ、それだけか」

「ああ、残念ながら、知り合いの痕跡はなかった」

「そうか。残念だな」

「金目になるものは持っていこう。わらわたちがこの城を開放したのじゃ。少々、財物をもつていっても怒られまい」

「それはたいへんありがたいのだが。リーゼ、いいのか？」

「めかけは、救世主さまがいいといえば、逆らいません」

「それではもらつていくか」

「お金ならわらが充分に持つておるのだが、旅するには、心細いものでな」

「ロザミアがいった。おれはロザミアがどれだけのお金をもつていいのか知らない。」

おれたちは、お城から、貴金属だけを持ち出して、町で売った。

3 (後書き)

できれば、毎日、更新したいのですが、できるかわかりません。

「有能な魔道士には心当たりがないな。詐術と虚勢ばかりの下衆な魔道士たちしか知らぬわ」

と、ロザミアがいった。

「そうか。知らないなら、仕方ないなあ」

おれはため息をついて、リーゼの方を見る。おれをこの世界に召喚した責任はリーゼにある。

「そんな目で睨まれても、めかけは困るのです。めかけだって、有能な魔道士なんて、一人も知らないのです」

リーゼが悪意のない笑顔で答える。ちくしょう。どうしたらいいんだ。それなら、これからいつたいどこに向かったらいいんだ。

「行く当てがないなら、行き先はわらわが決めよう。この近くに、凄腕の女剣士がいる。会うのは四年ぶりになるが、試しに訪れてみてもよいかな」

「凄腕の女剣士か。確かに、この怪物だらけの世界では、必要な人材だなあ」

「その女剣士は決して悪人ではない。むしろ、クソ真面目で、実直すぎるくらいだ。四年前から変わっていないければな」

「めかけに異存はないのです」

「なら、決まりだ。その女剣士のところに行こう」

リーゼの意見を確認して、おれが決めた。

そして、領主の城を出て、三日ほど東に歩いた。途中、宿屋があれば宿屋に泊まり、宿屋がなければ、毛布にくるまって野宿した。今は夏らしく、それほど寒くはなかった。この大陸は、年中、暖かいのだとロザミアが教えてくれた。

旅の途中で、サイクロプスに出会った。一つ目の巨人だ。五メートルはあるかという巨人で、巨大な棍棒をもっていた。

「なんという不運だ。こんな強い怪物に出会うなんて」

ロザミアが恐怖で逃げようとしていた。

「心配いらぬのです。救世主さまに適うわけありません」

とリーゼがいうので、仕方なく、おれが相手をすることにした。

凄じ速さで、サイクロプスは棍棒をおれの頭上に振り下ろしてきた。それを剣で払う。棍棒がおれの剣に当たって、ぶっ壊れた。

きよとんとするサイクロプス。おれに棍棒を壊されたのは、サイクロプスにとつても意外なようだった。

ちらつと後ろを見ると、ロザミアは真っ青になってがたがた震えていた。

まあね。おれはほとんど力を入れてないんだが。棍棒だって、軽く払っただけだし。

「逃げるか、サイクロプス？」

おれが声をかけたら、一つ目巨人はごおつと吠えた。

素手で殴りかかってくる。ことばが通じたのだろうか。愚弄されたと思っただのかもしれない。

「おりゃ」

おれが剣を振ると、サイクロプスの足はべちゃつと砕けた。倒れたサイクロプスの腹を切つて、とどめをさす。

「わあ、さすが救世主さまですう」

リーゼが喜んでいる。

ロザミアはというと、状況が信じられないらしかった。

「まさか、勝つたのか？ サイクロプスに」

声が震えている。

「ご覧のとおり」

おれはサイクロプスの死体に目をやった。足と腹が砕け、目が白目を剥いている。当然、動かない。

「信じられないな。まことの腕は、これから会う女剣士アイザに匹敵するかもしれん」

ほう。これから会う女剣士はおれと同じくらいに強いのか。おれは何だか、楽しみになってきた。

そして、田舎町から離れて、さらに山奥の僻地に、一軒の山小屋があった。そこで、女剣士が素振りをしていた。

「えいつ、えいつ、えいつ」

大きな剣を手に、真剣に修行に励んでいた。

「アイザではないか。久しぶりだな」

ロザミアが声をかけた。素振りをしていた女剣士は、目を点にして、喜びの声をあげた。

「まさか、ロザミア様ですか？」

女剣士がロザミアに向かって、走ってくる。おれとリーゼは、後ろに控えて見ていた。

女剣士は、ロザミアの手前メートルの距離に片膝をついて座ると、頭を下げ、忠誠を示す態度を表わした。

「ロザミア様、ご無事で何よりです。帝国の危機に、このアイザ、お役に立てなくて申し訳ございません」

「謝るのはこちらの方だ。わらわの無力さゆえに、帝国は滅びようとしている。わらわには、どうすることもできないのだ。もはや、わらわに仕えてくれる騎士は、アイザ、今はお前しかない」

おれは首をかしげて、口をはさんだ。

「あのさ、ロザミアが偉い人だつてのはわかるんだけど、ロザミアって、具体的にどれくらい偉いの？」

きつとアイザの視線がおれを刺した。

「何も知らないのですか、この従者たちは「アイザがいう。」

おれたちは従者にされてしまった。旅仲間ではないのか。

「うむ。わらわは身分を隠しておったのでな」

ロザミアがいう。困っているようだ。

「なあ、いい加減に教えてくれないか。ロザミアって、何者なんだ？」

おれが聞くと、アイザがロザミアに質問した。

「教えてもよろしいでしょうか」

「うむ。わらわから話そう。この者たちは、信用できるようだ。すでに、わらわの命を助けてもらっている。教えてもよからう」

「はい。ロザミア様」

そして、ロザミアがこちらを向いた。

「わらわは、かつて大陸を支配していたバツシュ帝国の今は亡き皇帝ルドルフ十三世の次女、ロザミア・バツシュである」

おれは正直、ちょっと驚いた。この世界の知識がまったくないおれであるが、皇帝の娘というのは、すごく近寄りがたい存在ではなからうか。

「リーゼ、帝国つてのは何なんだ？」

おれがしゃべると、アイザから罵声が飛んだ。

「なんだ、この男は痴呆症か何かか。帝国が何かもわからないのか」
まあ、そういわれても、おれがこの世界に来てまだ日が短く、おれがこの世界の事情をまるで知らないことはリーゼならわかるはずだ。

リーゼは答えた。

「バツシュ帝国というのは、八百年にわたって大陸を支配していた伝統ある帝国ですが、残念ながら、今年滅んでしまいました。皇帝も、皇太子も、お姫様も殺されたと聞いてますから、ロザミア様が本当に皇帝の次女なら、バツシュ帝国の帝位継承権をもつ最後の一人ということになります」

ロザミアがいきり立って発言した。

「確かに、父上も兄上も姉上も死んだ今、バツシュ帝国の皇帝の血を引くのは、わらわ一人しか残っていない。だが、まだ滅んではおらん。わらわが残っておる。わらわは、必ず、バツシュ帝国を再興し、憎きスニークから皇帝位を守ってみせる」

ロザミアは毅然としていた。

「ロザミア様、ご心中お察しします。このアイザ、命尽きるまでロザミア様に忠誠を誓う覚悟であります」

「うむ。どうだろう、アイザ、まこと、リーゼ。わらわたち四人だ

けしかおらんが、今一度、この四人で大陸を奪い返さないか」

ロザミアがおれたち三人に、とんでもない話を持ちかけてきた。ロザミアは恐らく本気なのだろう。たった四人で大陸が奪い返せるだろうか。難しいとしかいわざるをえない。だが、この無謀な決断をする信念がロザミアにはあるのだろう。

「このアイザ、当然、お力添えをする所存でございます」

アイザが最初に忠誠を誓った。

おれはリーゼの方をちらっと見ながら、

「いいよ。面白そうじゃん。帝国をおれたちの手で奪い返そう」と答えた。

「めかけも手伝うのです」

リーゼがいった。

「よし、決まりだ。この四人で、スニーク帝国を滅ぼし、バッシェ帝国を再興するぞ。必ず、必ず、わらわは成し遂げてみせる」

ここに、ロザミア皇女の大反撃が始まったのである。

「アイザ、このまことという男は、かなりの剣の達人なのだ。ひとつ腕を見てやってくれないか」

ロザミアがそう命じた。面白い。おれも、凄腕の女剣士というアイザの腕に期待していた。

「はい、かしこまりました、ロザミア様。よし、まこと、試し試合をするぞ」

アイザが二本の木刀をもってきた。

「アイザ、手を抜くなよ。まことは本当に強いぞ」

「それは楽しみですね、ロザミア様」

おれは剣をリーゼに預け、木刀をもった。

「ああ、危ないです。救世主さまに適うわけありません」

「うん？ 救世主とは、この男のことか？ それほどの腕なのか」

「はい。救世主さまは世界一強いはずです」

「面白い。斬りあえば、その腕はすぐにわかる。さあ、かかってこい、まこと」

アイザが木刀をかまえた。

面白い。おれも、真剣になって、木刀を構える。

「なんだ、それは。構えがなっておらん」

アイザから、さっそく叱責が飛んだ。そんなこといったって、おれは怪物退治はできるけど、剣の腕なんて素人だよ。

試しにアイザに向かって振り下ろしてみる。

木刀がアイザの頭上に落ちる。

まずい。このままでは、当たる。殺してしまうかもしれない。

慌てて、おれは木刀を止めた。それから、ゆっくり動く。

一方、アイザも木刀で斬りこんできた。

だが、おれは困ってしまった。いったい、どうしたらいいんだ。

遅い。アイザの動きが遅すぎる。まるで、止まっているかのように

見える。このままでは、勝ってしまうのではないか。

帝位継承者に凄腕の剣士として信頼される女の誇りを傷つけることはできない。

おれは、ゆっくりと動き、木刀をわざと当たらないように振りまわし、アイザの木刀が当たるのを待った。

バキンッ。アイザの木刀がおれの頭に当たって、大きな音がした。だが、まったく痛くはなかった。

「とったあ」

アイザが叫んだ。

「うむ。勝負ありだ。やはり、アイザの勝ちだな」

ロザミアが満足そうにしている。

「まこととやら、貴様、動きは素早いが、形が定まっておらん。隙だらけだ。そんなことでは、帝国の剣士として、やっていくことはできません」

ああ、おれはどうしたらいいんだ。

あきらめて、リーゼを見た。

「救世主さまはお優しいのです」

うん、いいなあ。リーゼはわかってくれている。

「おれの負けだよ。帝国の凄腕剣士に勝てるわけないよ」

そういつて、おれは木刀を放り投げた。リーゼから、剣を受けとる。

アイザは、声高々にロザミアに語りかけた。

「ロザミア様、正直、この男では、たいした戦力になりませんが、その代わりにわたしが二倍も三倍も頑張ります。必ずや、帝国を再建いたしましょう」

「うむ。ありがたい。がんばってくれ。わらわも、力の限り、剣を振らしてもらおう。それとっておくが、再建というのは正しくない。まだ、帝国は滅んでおらんからだ。帝国を本来あるべき姿に正すだけだ」

「申し訳ありません、ロザミア様」

やれやれ。帝国の再建か。だが、おれも約束したからには、バツシユ帝国の正常化に力を貸すことにしよう。

いったい何をやっているんだろっ、おれは。

帝都を目指すことになり、山小屋を旅立った。帝都に行けば、有能な魔道士がいるだろうか。

アイザの山小屋を旅立って、その日のうちに、ガイコツ剣士の群れに襲われた。

「くっ、敵は手強いぞ。ロザミア様は後ろへお下がりください。おい、まこととリーゼ、ロザミア様をお守りしろ」

アイザが怒鳴ったが、ロザミアが制した。

「いや、アイザ、わらわを特別扱いする必要はない。わらわも最前線に出て戦おう。むしろ、リーゼを守ってやれ」

アイザはしばし、戸惑っていたが、ロザミアの決断を不意にすることはできなかった。アイザが先頭に立ち、おれとロザミアが左右を固め、リーゼを後ろに配置して、ガイコツ剣士の群れに突撃した。

「いやああ」

アイザは斬るたびに掛け声をあげるらしい。かわいい声が響く。

ガイコツ剣士は八体ほどいたが、おれが五体、アイザが二体、ロザミアが一体を倒した。

「はあ、はあ、はあ、はあ。さすが、見事な太刀捌きです、ロザミア様」

「よい、お世辞などいわなくてもよい。わらわの腕がどれくらいかは、わらわがいちばんよく知っておる。アイザやまことには遠く及ばぬ」

「しかし、驚きましたな。まこととやら、実戦に強いタイプのようですね」

「だから、まことはアイザと同じくらい強いとおろっ」

おれたちは、そのまま、旅をつづけた。

帝都に向けて旅をしているおれたち四人の前に、ボロ服を着た男が現れた。

その男は、なんと、おれ、そっくりな顔をしていた。

「なんだあ？　なんで、あなた、おれと同じ顔をしているんだ？」

おれが驚いていると、そのボロ服の男は、怒りを顔にあらわにした。

「何が同じ顔をしているだ。ある時、突然、異世界に飛ばされたと思ったら、若造のように扱われ、学校などというところに通わされ、試験ではバカのような低成績しかとれず、ひ弱な体にむちうち走りまわることになり、秘密結社を探し出して、なんとかこの世界への扉を開いて帰ってきたというのに。体は、元のぼんくら下等生物のままだ」

何かわけのわからないことを話しているが、この男の愚痴を聞いていると、どうやら、この男、おれの世界に飛ばされ、おれになっていたらしい。おれとして、学校生活を送り、信じられないことに、地球から、地球にあつた秘密結社とやらを探し出して、異世界であるこの世界に戻ってきたらしい。

考えられない努力だ。すごいとしかいいようがない。

「おい、我輩と入れ替わった貴様、名前はなんというのだ！」

ボロ服の男は、怒鳴っておれに剣を向けた。

おれと入れ替わったというのは、どういうことだろう。わけがわからない。

「おれは、まことだけど」

「まことか。なるほど、我輩と入れ替わるだけあつて、良い名をしておる。だが、貴様の愚行は許しても許しきれん。我輩と勝負しろ」

勝負つて、また戦うのか。殺しちゃ、まずいだらうなあ。仕方ない。手を抜くか。

真剣を抜いて襲いかかって来たボロ服の男に、おれは剣の鞘を抜かずに、鞘当てで戦うことにした。

男の動きは当然、遅く、あまりにも貧弱であり、それはかつて、元の世界にいたおれのようだった。この世界のおれに適うはずもなく、振る真剣は何度も空を斬り、おれの渾身の一撃で腹に鞘当てされて、五メートルぐらいふつとばされた。

「痛い。痛いぞ。ちくしょう。なんてことだ。我輩は負けたのか。なんということだ。我輩はのつとられたのか」
「なんだか、よくわからない。」

ロザミアとアイザも、興味もなさそうに眺めている。

「いたい、なんだというのだろう。困ってリーゼを見ると、つま先で立っていた。」

「これは想定外なのです。ひょっとして、神さまがやってきたのでしょうか」

神さまだと？

この貧弱で、頭の悪そうな、おれの元いた世界でおれの代わりに学生をやっていた男が神さまだと？

「これはめかけの責任です。悪いのはめかけなのです。めかけが神さまと救世主さまを交換したのです」

リーゼがぺこぺこ謝っている。

「そうだ！ 我輩は神さまだぞ！」
おれそっくりの男は怒った。

「でもさあ、神さま、今は何の力もないんだろ」

おれがたずねると、
「そうだ！ 何の力もないわ！」
と怒鳴っていた。

「おれより弱いし」

「そうだ！ 貴様には勝てそうにもないわ！」
おれは困ってしまった。

「おい、まこと、この神さまとやらは何なのだ」

ロザミアが聞いてきた。そりゃ、不思議にも思っだろう。おれにだって、わけがわからない。

「救世主さま、めかけの頭では解決できないのです。どうしましよ
う」

リーゼも悩んでいるようだ。

おれはひらめいた。

「こうしよう。神さまには、おれたちの仲間になってもらおう。神
さまも、ロザミアに仕えて、バツシユ帝国を奪い返すんだ」

おれの大名言だった。この時のおれは天才だったかもしれない。

「まこと、この神さまという男、信用できるのか」

ロザミアが聞いてきた。

「信用できるんじゃないの。何せ、神さまだし。なあ、いいだろ、
神さま。おれたちの仲間になれよ」

この時のおれは弁舌さわやかだった。素晴らしい提案の応酬であ
る。

「神さま、めかけからもお願いです。神さまはめかけたちの仲間
になってください」

リーゼの説得が効いたようだった。

神さまはしばらく考え込んだ後、答えを出した。

「よかるう。我輩は、貴様たちの仲間になろう」

神さまの大英断だった。

「仲間になるなら、ロザミア様に忠誠を誓え」

アイザがいった。

「ロザミアとは誰かな」

「わらわじゃ」

ロザミアが答えた。

「うむ。我輩、この世界の神さまは、ロザミアに忠誠を誓おう」
こうして、神さまが仲間になった。

「おかしな男が仲間になったものだな。まるで使えんのかないか」
アイザが愚痴っていた。

その日、ドラゴンベビーの群れが襲ってきた。

「リーゼを囲め。気をつける。炎を吐いてくるぞ」

ロザミアが指示を出した。

おれとアイザは素早く動く。神さまも命令どおりにリーゼを囲んだ。

四体のドラゴンベビーに襲われたのだが、おれ、アイザ、ロザミアは、目の前の一匹を倒し、神さまだけ、ドラゴンベビーに負けていた。

「熱い。熱い。痛いよう。誰か、助けてくれえ」

神さまが泣き叫んでいる。

「神さま、がんばってください。めかけが代わりに頑張ります」

「待て。リーゼは下がってる。おれが仕留める」

口から吐いた炎で、神さまを燃やしていたドラゴンベビーを、おれが剣を振って、一撃で倒した。

「大丈夫か、リーゼ」

「ありがとうございます、救世主さま。めかけは大丈夫なのです。それより、神さまの傷の手当てをしてあげてください」

おれは必死になって、神さまの火傷を水で冷やした。

「まったく、使えないやつが仲間になつたな」

アイザが愚痴をこぼしていた。

「くそう、悔しい。我輩は神さまなのに」

いや、まったくもって、神さまには申し訳ない。おれの心の底から、神さまに謝る所存である。

「めかけも手伝うのです。すべてはめかけが悪いのです」

「気にするな、リーゼ。おれがなんとかする」

おれは頑張って、神さまの手当てをした。

6 (後書き)

最初、構想していたのはここまでです。
この後はいきあたりばったりになります。

「この近くに、スニーク帝国の小城があるな。手始めに、その城から攻め落としていくか」

ロザミアが帝国奪還のための作戦を練る。

「たった五人で、城攻めですか、ロザミア様」

アイザが意見をいうが、ロザミアは自分の作戦を押しした。

「そうだ。我々、五人で、スニーク帝国の城を攻め落としてやろう。わらわが決起したことを知れば、バツシュ帝国をしたう者が集まってくるかもしれない」

ということで、五人で、スニーク帝国の小城を攻め落とすことになった。

「どこから城に潜入しましょうか、ロザミア様」

「正面の門が開いているのだ。こそこそすることもあるまい。正門を通って、中央突破しよう。城主の間まで一直線に進撃してくれる」

「はっ、ロザミア様」

おれは戦争に詳しい事情も知らずに、一方に加担するのにためらいがあつたが、ロザミアはすでに大切な友人だ。ロザミアのために戦うのも悪くはない気がしていた。

それで、てつきり、戦争になるのだと思っていたのだが、事情は思っていたのとちよつとちがった。

スニーク帝国の小城は、怪物たちが警護しているのである。

「なんで、怪物が門番やつてるんだ、ロザミア」

おれが聞くと、ロザミアは答えた。

「スニーク帝国は、魔族に魂を売り渡し、怪物たちを飼いならして、帝国を支配しているのだ」

なるほど。怪物の国なら、やつつけてしまつのもかまわないかもしれない。

おれたちが正面の門を通つた時だった。門番のガラムを従えてい

る兵士が叫んだ。

「おい、あそこにいるのは、バツシュ帝国のロザミア姫ではないか」
すぐに大騒ぎになった。

「ロザミア姫は指名手配されている。急いで、捕らえろ」
兵士の上官が怒鳴った。ガルムがおれたちを襲ってきた。

「ロザミア様、ここはわたしが」

アイザがガルムに突撃したが、どうも勝てそうにない。おれも加勢に加わった。おれの一撃で、世界が変わる。ガルムはおれの攻撃で破裂して死んだ。

「なんだ、どうしたというのだ。ガルムが殺されたぞ。たいへんだ。城主に急いで報告しろ。狼藉ものが潜入したと」

スニーク兵が叫んでいる。

ロザミアがすらっと剣を抜いて、まわりにいる群衆に向かって宣言した。

「わらわはバツシュ帝国の帝位継承権をもつロザミア・バツシュである。バツシュ帝国はまだ滅びてはいない。これからわらわの軍がスニーク帝国を滅亡させるであろう。バツシュ帝国に忠誠を誓う者は、わらわに続け」

スニーク兵も黙ってはいなかった。

「バツシュ帝国の残党に好きにさせるな。時代が変わったことを思い知らせてやれ。それ、突撃しろ」

おれとアイザで、迫り来るスニーク兵と怪物たちをばっさばっさと斬り倒した。神さまもリーゼも後ろの方で戦っている。

ロザミアもみずから剣を抜いて、正面廊下を前進した。

「つ、強い。なんだ、この強さは。たった五人で、この城を攻め落とすつもりか」

「気をつける。本当に占領されてしまうぞ」

「城主さまは、城主の間においてになるのか」

八十くらいの兵と怪物を倒して、おれたちロザミア軍は、城主の間へ進軍した。

そこに、敵軍の城主がいた。近くに、魔族が控えている。魔族はスニーク兵を監視しているのだろうか。

「これはこれは、ロザミア姫。こんな田舎の小城にようこそ、おいでくださいました。マギトラ、どうやら、敵軍は相当な凄腕のようだ。我が城を守るのに力を貸してくれないかな」

「いいだろう。人間よ。このマギトラがいる限り、スニーク帝国の城が落とされることはない」

マギトラと呼ばれた魔族がおれたちに向かってきた。青白い肌、紫の衣装を着て、赤い目をしている。魔族だ。

「アイザ、魔族の相手はおれに任せろ。アイザは城主を倒せ」

「魔族相手にすごい自信だな、まこと。いいだろう。魔族の相手は、今日のところはおまえに任そう」

アイザはスニーク帝国の城主に向かって、足を進めた。それを制しようとする魔族を、おれが剣で斬り倒す。世界が変わった。魔族はおれの攻撃で一撃で死んだ。

アイザが城主の首をはねる。

「見たか、スニークの雑兵ども。これがバツシユ帝国の力だ」

アイザが大声でいった。

周りの群集がざわめいた。

「ロザミア姫の手下がこれほどの猛者たちとは。バツシユ帝国はやはりまだ滅んではいけないのではないか」

そんなささやきが広がっていった。

ロザミアが剣を高く掲げ、勝ち名のりをあげた。

「城主はバツシユ帝国の手によって葬られた。これより、この城はバツシユ帝国が再統治する。魔族と怪物はみんな叩き出せ」

「おおおおおおお！」

と大歓声があがった。この城の生き残りたちは、再び、ロザミアへの忠誠を誓うことを約束し、順番に城主の椅子に座ったロザミアに拝礼に来た。ロザミアの前に行列ができた。

怪物と魔族はこの城から追い出され、逃げていった。

「どうやら、初戦は勝ったようだな」

おれはリーゼが無事か見に行った。リーゼは元気そうにしていた。「聞いてください、救世主さま。めかけも敵兵を一人やっつけたのです」

笑いながら、リーゼが近寄ってきた。

「おお、それはすごいなあ。やったなあ、リーゼ」

おれがリーゼを褒めていると、アイザがいった。

「敵軍のほとんどは、わたしとまこととロザミア様でやっつけたのだ。神さまが倒した敵はいまだにゼロと」

圧倒的な差を知らされて、神さまは落ちこんでいた。

「悔しい。この体はいうことを聞かん。我輩は神さまなのに」

「おい、神さま、ジュースとパンを買って来い」

アイザが神さまに命令した。

「我輩、神さまなのに」

神さまは仕方なく、ジュースとパンを買いに行った。

小城を占領し、バツシユ帝国が再び領土を手にした。その城の住人がロザミアに忠誠を誓う謁見をしている間に、占領後、二日目がすぎた。

ロザミアは少数精鋭を主張し、今まで通り、五人で帝都に向け旅をすることになった。

旅の途中、巨大蜂に襲われ、おれとアイザとロザミアで退治した。「神さまが倒した怪物の数はいまだにゼロと」

アイザが聞こえるように嫌味をいう。なんだか、神さまが可哀相になってくる。神さまだって、必死に戦っているのだ。

「ぢくじょう、ぢくじょう、今に見ておれ」

神さまが悔しくて泣き出した。どうしたものか。

だが、次の日、意外なことを神さまがいい出した。

「この中でいちばん剣術が巧いのは誰なのだ」

「うん？ いちばん強いのはアイザだが」

ロザミアが答えると、

「ならば、アイザ殿。この我輩に、剣術の稽古をつけてくれないかと神さまがいい出した。ああ、あの人、神さまなのに。」

「面白い。いいだろう。神さまとやら、このアイザが剣の極意を教えてやるう」

こうして、その日から、神さまの剣術の修行が始まった。

「えいつ、やあ、とお」

神さまが頑張って木剣を振っている。

それから、三日ほど、たった時だった。神さまは毎日、修行をしている。

旅の途中に、怪物がまた襲ってきた。それが、今までと雰囲気がちがった。怪物の体から瘴気が出ている。おそらく、魔族だ。

「マギトラがやられたというから見に来たが、魔族に逆らう愚か者

「たちは貴様らか」

身長三メートルほどの太った魔族が現れた。

その姿を見て、ロザミアとアイザが青ざめた。

「あれは、魔王だ」

ロザミアが震えている。

アイザも震える手で、剣をがたがた抜きながら、ロザミアの前に出た。

「どうしましょう。ロザミア様。逃げるしかありません」

あまりにも二人が怖がっているんで、おれがいつてやった。

「安心しろよ。あいつが魔王だろうと、おれがやっつけてやるよ」

リーゼも同意する。

「そうです。救世主さまなら、魔王にも負けるわけありません」

それを聞いて、魔王がおれをギロと見た。

「ふん。雑魚に用はないわ。この魔王に勝てると思っているのか」

そこへ、ロザミアが勇気をふりしぼって、魔王に話しかけた。

「魔王、スニーク帝国には、貴様が手を貸しているのさあろう」

「ふん。人間どもの事情など、この魔王には関係のないことだ。好きなようにさせてもらっている」

そして、おれたち五人を眺めまわした魔王が驚愕して叫んだ。

「おい、まさか、貴様、神か！」

神さまを見て驚いている。

「いかにも、我輩は神さまであるが」

「この魔王と戦うつもりか」

「我輩が逃げるつもりでもないのか。挑まれた勝負は拒まない」

魔王はがははと笑った。

「面白い。貴様らの中に神がいるなら、話は別だ。神よ、全力で相

手してやる。スニーク帝国の帝都で待っているぞ。がははははっ

魔王はそういうと、立ち去っていった。

残されたおれたちはしばらく呆然としていた。周りから瘴気が消

えるまで時間がかかった。

えるまで時間がかかった。

「神さま、魔王と戦っても勝てるわけがないです。神さま、死んじやいますよ」

リーゼがいった。

「我輩は魔王を嫌いではない。だが、勝負を挑まれて、逃げる理由もない」

神さまは堂々と答えた。

「おい、リーゼ、神さまが死んだらどうなるんだ？」

おれが聞くと、

「めかけが思うに、救世主さまが生きていれば、神さまが死んでも、別にどうにもならないと思います」

それを聞いて、おれは安心したが、複雑な気分だった。

神さまが魔王と戦えば、まずまちがいなく、神さまは死ぬだろう。そうしたら、おれがこの世界の神さまをやらなければならぬのだろうか。

リーゼといろいろ相談したが、

「救世主さまの好きなようにすればいいです。悪いのは、すべてのめかけなのです。悪いことが起きたら、すべての責任はめかけがとります」

といていた。

それでいいのだろうか。責任をとるって、どうやってとるのだろうか。おれは深く悩んでしまった。

神さまは毎日の剣の修行は怠らなかった。

8 (後書き)

また、構想していた分が一区切りついた。

この先、ちゃんと毎日更新できるか心配です。

なんとか、頑張りたいです。

旅をしていると、巨大ムカデ三匹と戦闘になった。

巨大ムカデは、固い殻をしているらしく、その表皮はロザミアの剣を弾いた。巨大ムカデの尻尾に叩かれ、ロザミアの体が地面に叩きつけられ、跳ね返った。ロザミアは何とか立ち上がったが、足がふらつき、目の焦点が合っていない。危険だ。

「ロザミア様」

アイザが呼びかけるが、当のアイザも、別の巨大ムカデの足に剣を突き立て、せめぎ合っていて、助けに行くことができない。このままでは、ロザミアがやられてしまう。アイザの腕でも、巨大ムカデの表皮に浅い傷をつけるのが精一杯のようだった。

おれは自分の目の前の巨大ムカデを一撃で倒し、ロザミアの方へ走った。

「やめてえ」

ロザミアの前にリーゼが立ちふさがり、巨大ムカデに尻尾で叩き飛ばされた。

「リーゼ」

おれは叫んだ。巨大ムカデは、幸い、ロザミアを狙っているようだ。ロザミアの方に近づいていく。

ロザミアはまだふらふらしており、剣をかまえることができずに、ふらふらと揺れていた。

「ロザミア」

おれは、ロザミアに向かって叩きつけられた巨大ムカデの尻尾を体で受け止めた。ばしんと音がしたが、まったく痛くはなかった。

「まこと、大丈夫か」

ロザミアが声をかけてくる。

「まこと、ふんばれ」

巨大ムカデと戦っているアイザが叫んだ。アイザの加勢に向かっ

た神さまも、巨大ムカデに尻尾で吹っ飛ばされていた。

「大丈夫だ、なんともない」

おれは二匹目の巨大ムカデを一撃で倒し、ロザミアとリーゼの安全を確認した。

「めかけは大丈夫なのです」

リーゼは傷つきながらも、元気な笑顔でそういった。

「とああっ」

ぐさつとアイザの剣が巨大ムカデの殻を突き抜け、なんとか、三匹目も仕留めたようだった。

ふうっ、今回は苦戦した。おれが油断したからだ。気をつけないといけない。

三匹の巨大ムカデの死体を前に、おれたちはぐったりと座りこんだ。

「ロザミア様、大丈夫ですか。あまり無理はなさらないください」
アイザが責めるように進言するが、ロザミアはどこか遠くを見ていた。

「今回は死ぬかと思った」

「ロザミアがいった。」

「わらわはまことが助けてくれなければ死ぬところであった」

「ロザミアが虚ろな目で空に向かってしゃべっている。」

「ロザミア、本当に大丈夫か」

おれが声をかけると、ロザミアはこちらを向いた。虚ろな目をしていた。

「実はな、わらわには許婚がいるのじゃ」

突然、ロザミアがそんなことをいった。

皇帝の娘として生まれたロザミアに許婚がいても、不思議なこととは思われなかった。

おれは話のつづきを待った。

「それがな、その許婚は、決して悪人ではないのだが、まことのようには、心が強くないのだ」

いったい何の話か、よくわからなかった。なぜ、おれの名前が出てくるのだ。ロザミアは少し顔を赤らめているようだった。

「まこと、わらわはその許婚と結婚するべきであろうか」

「それは、すばいんじゃないのか？」

おれが答えると、ロザミアは怒った顔をした。

「なんじゃと。まことはわらわがどうなってもいいというのか」

いったい何の話か、よくわからなかった。

ロザミアは怒って、おれを突き飛ばし、アイザの方へ行ってしまった。

おれは困ったので、リーゼに相談した。

「なあ、リーゼ、ロザミアはいったい何がいたかったんだ？」

リーゼは笑っていた。

「それは、めかけが教えることではないのです」

「うーん、でもなあ、ひよっとして、ひよっとしてだよ」

おれは口ごもった。

リーゼはおれが話すまで待っていた。

ひよっとして、ひよっとしたらだけど。本当におれも何かの気のまちがいかと思うんだけど。

「ひよっとしたら、ロザミアって、おれに、気が、気が、あるんじゃないのかな」

思いきって、リーゼに相談してみた。こんなことを聞けるのはリーゼしかない。

だが、リーゼは笑って答えた。

「めかけが思いますに、それは救世主さまの気のせいです」

「そうかなあ。急に許婚の相談なんてされたから、何かと思っちゃったよ」

リーゼは真剣な顔をしていった。

「めかけが思いますに、絶対にそれは救世主さまの気のせいです」ということなので、この話はおれの気のせいだということが終わった。

横で聞いていた神さまが、ロザミアのところについて話しかけた。
「ロザミア殿、許婚の問題で悩んでおるそうだが、我輩は一度、人間というものと結婚してみたいと思っておるのだが。我輩ではどうかな」

「お主は黙っておれ！ これはわらわの問題じゃ」

「そうだぞ。神さまのくせに生意気だ」

ロザミアとアイザに速攻で断られる神さまだった。

9 (後書き)

書くことがなくなったんで、ちょっと早いけど、フラグを立ててみました。

「この近くに、巨大アリの巣があるらしい。どうも、その巨大アリに襲われて、この近くの住民は困っているらしい」

ロザミアがたどりに着いた街で情報をもらってきた。

「巨大アリですか。油断できませんね」

「うむ。スニーク帝国のやつらは、まったく対処する気配がないよ。うなので、わらわたちで巨大アリを退治しに行こうじゃないか」

おれに特に異はなかった。アイザも勇んでいるようだ。

神さまの毎日の剣術の稽古はつづいている。アイザがいうには、見所がないらしいが、アイザもあきらめることなく、相手をしていく。

「神さま、練習の成果を見せるところだな」

おれがいうと、

「我輩は頑張るであります」

と神さまは答えた。

街から少し離れた山の中に、巨大アリの巣があった。巣は、人が通れるくらい大きな横穴だった。中は複雑な迷路のようになっている。

巣の中に入ると、すぐに巨大アリに襲われた。うじゃうじゃと、何百匹も居そう。アイザが最初の一匹目で苦戦している。ロザミアが手助けして、なんとかとどめをさした。これはやばいと雰囲気を読みとって、おれがアイザを押しつけ、先頭を走った。

「待て。早まるな、まこと」

アイザが声をかけてきたが、おれは無視した。この巣の中の巨大アリを、おれは剣で一匹、一匹、倒していく。

巨大アリは、巣に危険があったと察知したらしく、兵隊アリが巣の奥からゾロゾロと出てきた。だが、しかし、おれの敵ではない。一振り、二振り、剣を振るごとに巨大アリは死んでいった。同時に

世界が変わっている。

「おれは突撃する。アイザはロザミアを守れ。リーゼはおれと一緒に来い。離れると、危険だぞ」

おれが指示を出し、ロザミアは、

「まことのいうとおりにしる」

と、承諾した。

神さまは逃げまわっていた。

「まったく、敵が強すぎて、練習にならんわい。我輩、困ったでござる」

神さまは落胆していた。

おれは三十匹以上の兵隊アリを倒して、巢の奥へと進んだ。

「めかけが思うに、巢の奥につづく道はこっちです」

リーゼも必死のようだった。巨大アリの攻撃を杖で受けて、身を守っている。リーゼを襲う巨大アリは、速攻でおれが倒していく。

おれはまた百匹以上の巨大アリを倒したと思う。おれが倒しそびれた巨大ア리를アイザとロザミアが戦っている。神さまは逃げまわっているようだ。まるで、歯が立たないらしい。

「めかけが思うに、巨大アリたちはこの道の奥を守っています」

リーゼの示す道をおれは邁進する。巨大アリが次々と倒されていく。おれの敵ではない。全部、一撃で仕留めている。ロザミアたちと少し距離ができた頃だった。

巨大アリの巢は、あまりにも奥が深く、駆逐には相当な時間がかかった。おれたちが巨大ア리를倒している間に、夜が明けたのではないだろうか。眠気など、まったく感じずに、アドレナリンを分泌しまくって、おれは巨大ア리를駆逐していた。

巢のいちばん奥に、大きな十メートルはあるかという巨大アリがいた。

「なんだあ！ あんなやつがいるのか？」

おれは困惑したが、リーゼのことはですぐに状況を理解した。

「めかけが思うに、あれは女王アリです」

なるほど。女王アリか。どうりで、桁違いにデカいわけだ。

おれは剣を身構えた。巨大アリたちは、女王アリを守るためなら、命を惜しむことなく向かってくる。おれはそれを容赦なく、一撃で屠り去っていく。

「人類がこの巢に何のようだ」

女王アリは人のことばを話した。

「人類の街を守るために、死んでもらう」

「なぜ、我々、アリが悪で、人類が正義なのだ。そんなのは、一方的な思い込みではないか。我々、アリが生きていくには、人類の住処の餌が必要なのだ」

くっ、返すことばが思いつかない。おれはことばに窮した。

「この世界がどうあるべきかは救世主さまが決めるのです」
リーゼがいった。

難しい。本当に、おれがどちらが正しく、どちらがまちがっているかを決めてもよいのだろうか。

「なぜ、我々の生き様を人類の救世主などに決められなくてはならない」

「それは、救世主さまはこの世界の主だからです」

「そんなものは認めないわ」

女王アリがおれに向かって体当たりしてきた。おれは女王アリの体当たりをくらっても、痛くもかゆくもなかった。

「悪いけど、おれは、人類をえこひいきしているんだ」

そして、おれは一撃で女王アリを殺した。世界が変わる。

女王アリの死体はどさつと、洞窟の地面に倒れ落ちた。

後から、ロザミアとアイザと神さまがやってきた。

「よかった。無事だったか、まこと、リーゼ」

ロザミアが心配して声をかけてきた。

「正直、やられているのかと思ったぞ」

ロザミアは勝利に笑顔を絶やさない。

「今日のまことはいい働きをしたな」

アイザもおれを褒めてくれた。

だが、おれが話を聞きたいのは神さまだった。

「なあ、神さま、神さまはこの世界に生きる生き物の誰の味方なんだ？」

おれの真面目な質問に神さまは答えた。

「うむ。我輩はそれを気まぐれで決めておった。これまでも気まぐれだし、これからも気まぐれだ」

なるほど。そういうものか。それが神の視点か。

「リーゼ、おれは正しいことをしているのだろうか」

おれは落胆して、たずねると、リーゼは相変わらずの笑顔で答えた。

「めかけは、めかけたちを守ってもらうために救世主さまを召還しました。めかけが思いますに、救世主さまはめかけの敵にまわったことはありません。救世主さまは、まちがっていない道を進んでいると思います。それに、救世主さまがこうだと決断したことを妨げる権利をめかけたちはもっておりません」

おれは、この世界を任せられた責任を感じて、次の夜はなかなか寝付けなかった。女王アリのことをばを思い出しているうちに、おれはいつの間にか眠ってしまった。

10 (後書き)

この作品がもしアニメ化されることがあったら、

題名は「神性交換リザヴェリータ」にしようと思います。

毎日、更新できるか、難しいです。

この日、誤字修正しました。召還を召喚に修正したなどが主です。

「これから行く城は、昔はシュナイク将軍が治めていたのだが」

ロザミアがいった。

「シュナイク将軍とは？」

おれが聞くと、アイザが驚いたようだった。

「貴様、名将シュナイク将軍を知らないのか？」

「いや、リーゼに聞けばわかると思うけど、おれはこの世界の事情に詳しくないんだ。名将シュナイク将軍のこと当然、知らない」

「まったく、あきれたやつだ。シュナイク将軍とは、十年ほど前のワイルドミッツの反乱を征圧したことで功があるかつてのバツシュ帝国一の名将だ」

なるほど。

「だが、シュナイク将軍は、バツシュ帝国を裏切り、スニーク帝国に寝返った。どうやら、父上が殺されたことで、バツシュ帝国に見切りをつけたらしい」

「へえ、どんな人なの、シュナイク将軍って」

おれの質問に、アイザが答えた。

「帝国を裏切ることがなければ、あれほど尊敬に値するお方はいない」

ロザミアもシュナイク将軍を高く評価する。

「シュナイク将軍は、できることなら、ぜひ、説得して、我が軍の味方に引き入れたいものだが」

おれはシュナイク将軍に興味をもった。その希代の名将は、誰を正しく、誰をまちがっているかと判断するだろうか。ぜひ、聞いてみたい。

だが、城下町での噂では、今はこの城にシュナイク将軍はいないらしかった。

「シュナイク将軍は、北へ遠征したよ。今、城に残ってるのは、バ

ルトという下衆どもさ」

「シユナイク將軍はいつ帰ってくるんだ？」

「数年は戻らないって噂だね」

「どうやら、希代の名将に会うのは、困難らしい。運というか、めぐり合わせがわるかった。」

「まさか、あなたはバツシュ帝国のロザミア姫ではございませんか」
正体を見破られて、ロザミアはうろたえた。

「絶対に内緒にしてくれ」

アイザがロザミアの正体を見破った町人に口止めした。

「はい、わかつてございます。ですが、ロザミア様、できることなら、この城主バルトをこの街から追い払ってください。バルトの悪政はひどすぎます」

ロザミアはおれとアイザの顔を見た。おれたちがうなずくのを確認すると、ロザミアはいった。

「わかった。これより、バツシュ帝国再興の決起をいたす。このロザミア・バツシュに従う者についてはまいれ」

ロザミアは街の真ん中で堂々と大声で宣言した。

群集は大騒ぎになった。今にも滅びそうなバツシュ帝国につくか、怪物と手を結んだスニーク帝国に従うか。

「どうやら、ロザミア姫が大眾を扇動しているようだ。逮捕しろ」
「警吏がやってきて、ロザミアを逮捕しようとした。おれとアイザで、斬り殺す。」

すると、大歓声があがった。

「おおおお、ロザミア様は本気でスニーク帝国に逆らう気だぞ」
「バルトを追い出せ」

ロザミアは剣を高く掲げ、大声で号令した。

「それ、バツシュ帝国に従う者は、我につづけ。この城を攻め落とすのだ」

おれとアイザが先頭をきって、スニーク帝国兵士を倒していくと、群集もその気になってきた。次々と、ロザミアに味方する者が増え

た。何万人の大暴動となった。

暴徒が城に攻め込む。

以前と同じように、スニーク帝国領土の城には怪物が飼いならし
てあるのだが、みんな倒していった。

城主のバルトは相当民衆に恨まれているらしく、暴徒は必死にス
ニーク兵と戦った。それも命をかけて。

暴徒の中心にロザミアがいた。おれたち四人が囲んでいる。

「この城には、ミノタウロスがいるようです」

暴徒から報告を受けとったロザミアは、おれとアイザに命令した。

「ミノタウロスを倒してくるのじゃ」

「はっ、ロザミア様」

「おう、万が一にも、命を落とさないようにな。ちょっと突撃して
くるぞ」

おれとアイザは、暴徒の最前線まで走っていった。暴徒はすでに
城門を壊し、城内に侵入している。だが、しかし、スニーク帝国の
従える怪物に苦戦しているようだった。

「どけどけどけ、ミノタウロスはどこだ」

「あつちです」

暴徒が教えてくれた。

行くと、半牛半人の巨体が大きな斧を振りまわして暴れていた。

暴徒が次々と倒されていく。

「ミノタウロスの相手はわたしたちに任せろ」

アイザがいつて、ミノタウロスに突っ込んだ。うまく、斧をかわ
している。だが、ごっと音がして、斧の柄で殴られた。アイザは五
メートルぐらいふっとんだ。

「大丈夫か、アイザ」

おれがミノタウロスに剣を振り下ろすと、一撃でミノタウロスの
体は破裂した。

ミノタウロスを倒した。

「おい、バルトとロザミア姫が一騎打ちをするらしいぞ」

そんな噂が入ってきた。

アイザを助け起こし、急いで、正面廊下へと走った。そこでは、ロザミアと敵将バルトがそれぞれ群衆を率いて、対峙していた。

「バルトとやら。お主も将の器なら、このロザミアの一騎打ちを受けろ。貴様など、わらわ自身の手で引導を渡してくれるわ」

バルトは、怯えているようだった。だが、この敵味方の大群衆の前で、逃げることはできなかった。

「いいだろう。小娘、勝負してやるぜ」

バルトとロザミアの勝負は一瞬でついた。ロザミアの剣がバルトの心臓に深く突き刺さった。

「おおおお、ロザミア姫の勝ちだ。バッシユ帝国万歳」

こうして、あらたに、城がひとつ、バッシユ帝国のもとに戻った。戦いが終わった頃、神さまが現れていった。

「まこと殿、どうやら、少年兵というのは相当に強いようだ。我輩では歯が立たなかった」

まあ、死なないように戦ってくれば、それでいいよ。おれはそう思って、神さまをねぎらった。

11 (後書き)

いろんなフラグを立てておくのに必死。
今回は、敵の名将の伏線を張ってみた。

ロザミアは城の人たちと相談し、將軍を決め、バツシュ帝国軍を組織してもらうことにした。ナインハルト將軍は、バツシュ帝国総司令官となり、軍を動かし、スニーク帝国と戦うことになった。

おれとリーゼとアイザと神さまは、ロザミア姫の直屬軍として任命され、今までどおり、ロザミアと一緒に五人で旅をすることになった。

「なんだか、不思議な気分ですね。バツシュ帝国総司令官の上に立つ総大将の直屬軍というものは」

リーゼがいった。

「うむ。わらわも迷ったのだが、やはり信頼できる者といった方が気が楽で安心じゃ。それに、今のやり方で成功しているのだから、やり方を変える必要もあるまい。わらわは、少数精鋭で敵陣を奇襲しつつけるつもりじゃ」

ロザミアのことばを聞いて、アイザが真面目に提言した。

「ロザミア様、わたしからこのようなことをいうのは出すぎたことかもしれません。皇帝位にはいつ戴冠を受けるのですか？ ロザミア様しか、バツシュ帝国の帝位継承権をもたない以上、早めに戴冠された方が、味方の士気も上がると思うのですが」

ロザミアは困った顔で答える。

「わらわは今すぐ戴冠を受けてもかまわないと思っておる。だが、戴冠の儀式は、婚礼の後に行われるのが慣例じゃ。婚礼の問題を解決せねば、戴冠するのは気が引けるのじゃ」

「そうでありましたか。差し出がましいことを申し上げてしまいました」

「何かまわぬ。確かに、早急に帝位についた方がよく、婚礼の儀の前に戴冠した前例がないわけではない」

おれは気になってたずねた。

「ひよつとして、今、ロザミアの許婚のところに向かっているのか」「そうじゃが。何か悪かろうか。真つ直ぐ帝都を目指しても良いのじゃが、多少のまわり道になるなあ」

「いや、異論があるわけじゃないんだ」

ロザミアの許婚は、アレクサンドル・シューマツハというらしい。体は弱いが、賢明な男なのだそうだ。ロザミアとの仲も決して悪いわけではないらしい。

五日の旅の果て、ロザミアの許婚の屋敷についた。スニーク帝国に占領されている街だとはいえ、かなり大きな街で、アレクサンドルの屋敷は大豪邸だった。

だが、不思議なもので、屋敷には人が一人もいない。まったくの無人だった。廃屋になっているのではないだろうか。

おれたちは不審に思って、勝手に門を開け、屋敷の中へ入っていた。

無人の屋敷を探すこと、数時間、アレクサンドルは、自室の小部屋で死んでいるのが見つかった。胸が焼かれ、おそらく、魔法で殺されている。

「なんとということじゃ。アレクサンドルが、死んだ」

ロザミアが呆然としてみると、屋敷の奥からキキキツと笑う小悪魔の声が聞こえてきた。ミニデーモンだ。五匹いる。

「ききききつ、婚約者を殺された気分はどうだ、ロザミア姫。いつでもおくけど、悪いのはロザミア姫の方だよ。スニーク帝国に逆らうんだから、これくらいの罰を受けて当然さ」

「ききききつ、お前たちも死んでしまえ。それ」

ミニデーモンが炎の魔法で、おれたちを燃やそうとしてきた。火球が宙を飛んでくる。

「危ない。神さまを盾にしろ」

アイザが神さまを火球にぶつける。

「あちちちちつ、熱い。熱いでござるよ、アイザ殿」

「神さまはこれくらいしか役に立つことがないんだから、我慢しろ」

アイザが酷いことをいつている。

「急いで、この小悪魔たちを倒すのじゃ」

ロザミアが剣を抜いた。

ミニデーモンから、また火球が飛んでくる。おれに当たったが、痛くもなんともない。

次の火球は、リーゼに当たったが、やはり無傷のようだ。

「えへへ、めかけは魔法防御は高いのです」

リーゼが無事なら、安心して戦える。この戦いは楽かもしれない。
「おりゃ」

おれは走って、ミニデーモンを一匹、剣の一撃で斬り殺す。

「あわわわ、お前たち、我々に逆らうつもりだな。許しがたい。許しがたいぞ」

ミニデーモンが文句をいつているが、おれはその間に二匹目を倒す。

飛んできた火球を、再び、アイザが神さまを盾にして防ぐ。

「熱い！ 無茶苦茶でござる」

アイザは魔法は苦手なのだろうか。今回は、防戦一方だ。おれが三匹目を倒すと、リーゼが珍しく最前線に出て、ミニデーモンを杖で叩いている。だが、致命傷は与えられないようだ。

「リーゼ、おれに任せろ」

おれは四匹目、五匹目と連続して、剣で斬り殺す。

「あははは、めかけの出番がなかったのです」

「いや、今回はリーゼはよくやった方だよ」

おれはリーゼを心配して、火球で燃えたはずのリーゼの体を調べた。

「心配しなくても、めかけは大丈夫なのです」

「そんなこといったって、万が一のことがあったらどうするんだ」
おれがそういつていたら、ロザミアがしかめっ面で顔を声をかけた。

「ほほう、まことは、わらわよりもリーゼが気になるのだな」

「あ、いや、別に特に気にしているわけでは」

「ふん、わらわの許婚は死んだ。わらわは新しく、婿殿を探さねばならぬ。まことのようなスケベには、ふさわしくないからな」

「なんだよ。なんで、おれが出て来るんだよ。おれのどこがダメなのさ」

「まことは、わらわのことなんて、好きではあるまい」

「そんなことないよ。ロザミアだって、大事な仲間さ」

すると、ロザミアが顔を真っ赤にしていった。

「別に、わらわはそんなことをいわれても嬉しくないのじゃからな」
その日の夜もふけていった。

12 (後書き)

更新がぎりぎりです。

ある日、突然、更新が間に合わなくなっても、見捨てないでくださいね。

できる限り早めに書くようにしたいと思います。

「この街には、幽霊戦士が出るのです」

着いた町でそういわれた。

「町の中に怪物が出るのか？」

「はい、そうです。何人も襲われ、帰らぬ人となっています。スニーク帝国の兵士に頼んでも、退治してもらえません」

おれはロザミアを見た。

「うむ。ここはわらわたちが幽霊戦士とやらを退治して、町の平安を守るしかあるまい」

そこで、幽霊戦士の出る道路に、夜中、張り込むことにした。

幽霊戦士が出てこればいいのだが、なかなか、出てこない。深夜も二時をまわった。

「ふうむ。困ったのお。何日もこの町に滞在するわけにはいかない。できれば、今夜、幽霊戦士を退治したいのじゃが」

ロザミアがため息をつく。

「こういう判断は難しいものだ。ロザミアの心労をとり除くためにも、ちゃんと、今夜、幽霊戦士に出てきてもらわなければならぬ」

「おい、神さま。お前、困になって、通りを歩いてみる」

アイザが神さまに命令する。

「我輩、困でござるか。まあ、嫌ではござらんがな」

神さまが危険地帯、よく出没する地帯を歩いてみた。神さまは、あからさまに挙動不審に通りを歩く。

だが、幽霊戦士は出てこない。

「おい、何やってんだ。神さま、ちゃんと仕事しろ。うまく、幽霊を誘き出すんだ」

「そんなことをいわれても、我輩、何をしたらいいかわからないでござる」

「神さま、試しに血を一滴、流して見てくれないか。わらわが思う

に、血の匂いをかぎつけて、幽霊戦士が現れるのではないじゃろうか」

「我輩、わざと傷をつくるのでござるか。それは、我輩の役目なのでござるか」

しぶる神さまをアイザが叱責した。

「そうだ、神さま。お前の仕事だ。早く、指を切って、血を垂らせ」

「みんな、人使いが荒いでござる」

「早くしろ、神さま」

「わかったでござる」

神さまが血を一滴流すと、ロザミアの予想通り、血に飢えた幽霊戦士がうじゃうじゃと浮かびあがってきた。何も無いところに、突然、身長三メートルはある鎧武者が現れたのであった。

その数は、予想に反して多く、十五体くらいの幽霊戦士がいた。

「何か、この世に未練を残して死んだ兵士団だろうか」

ロザミアはそう分析する。

「めかけには声が聞こえます。殺し損ねた。殺し損ねた。殺し損ねた。と呟いています。ロザミア・バツシュを殺し損ねたと呟いています。どうやら、ロザミア様を殺し損ねた罰でスニーク帝国に殺されたスニーク兵の亡霊のようです」

「なんと。わらわの命を狙って、化けて出たというのか。許しがたい。そのような愚かな亡霊は、皆殺しにして、成仏させてくれる」

ロザミアが剣を抜いた。

「へぼっ」

神さまが幽霊戦士に殴られて、三メートルくらいふっ飛ばされていた。

「痛い。痛いでござる。我輩、何も悪いことはしてないでござる」

「神さま、よくやった。後はまかせろ。やあ」

アイザが幽霊戦士に斬りかかったが、剣はするりと幽霊戦士の体を通り抜けた。

「なんだ？ 何が起こった」

アイザが不思議がる。

ロザミアも、幽霊戦士に斬りつけてみて、剣が素通りするのを確認した。

「どうやら、この幽霊たちには、わらわたちの剣が効かないようじやの」

「痛っ」

アイザの腕から血が出た。アイザが幽霊戦士に腕を斬られたのだ。ロザミア様、気をつけてください。こちらの攻撃はすり抜けるのに、向こうの剣はこちらに当たるようです」

「うむ。敵のすべての攻撃をかわすしかあるまい」

アイザもロザミアも苦戦しているようだった。こちらの攻撃はすり抜けるのに、相手の攻撃は当たるのでは、不利としかいいようがない。勝てるわけがない。何か、幽霊戦士の弱点を見つけなければ、勝ち目はないだろう。

そう、おれがいなければ。

というのも、おれの攻撃は、普通に幽霊戦士に当たるからだ。ズサツと幽霊戦士を斬り裂いて、剣を返す。世界が変わる。おれの一撃で、幽霊戦士は死んでいく。

「おれに任せる。アイザ、ロザミア」

おれは次々と、幽霊戦士の鎧に剣を振り下ろしていく。

ズサツ。ズサツ。ズサツ。

幽霊戦士が、一人、二人、三人と倒れていく。おれの攻撃は、なぜだかわからないが、幽霊戦士に効く。

「おお、まこと、見事じゃ」

「ふふっ、やるな、まこと」

ロザミアとアイザが褒めてくれる。

おれは四人を後ろに下げて守り、一人で幽霊戦士の群れと戦った。「がんばれ、まこと」

「油断するな、まこと」

ロザミアとアイザの応援を受けて、幽霊戦士を一人、また一人と

倒していく。数十分後には、十五体の幽霊戦士全部を退治することができていた。

やった。おれは久しぶりに勝利の喜びと安堵を感じていた。今回は危なかった。ロザミアとアイザの剣が通用しないのだ。幽霊戦士はかなり危険な強敵だった。

「勝ったあ」

おれは気力が疲れて、剣を鞘に収めると、座りこんだ。

「よくやった、まこと」

「すごいぞ、まこと」

「救世主さまはさすがです」

おれにみんなの賞賛が浴びせられた。

「我輩も戦っていたのだが、誰も見ていなかったのかな？」

神さまが遠くで寂しそうにしている。

「神さまは一体も倒してないじゃないか」

「そうだ。神さまのくせに生意気だぞ」

「まあまあ、そういわずに。よく頑張ったね、神さま」

おれが声をかけると、

「ふん。我輩は憐憫を買うつもりはないのじゃ」

と神さまはすねてしまった。

翌日、幽霊戦士を退治したことを町の人に知らせると、泣いて喜んでくれた。おれたちがロザミア・バツシュの一行だとは黙っていた。

「しかし、こう何度も怪物に襲撃されると、うっとおしくなってくるなあ」

アイザが珍しくへばっている。

「そういうな、アイザ。旅を終えるまでには、まだ、今までの何倍も戦わなければならない。根をあげるわけにはいかないぞ」

おれが諭すと、

「もちろんだ。決して、戦うのが嫌になつたわけではない。むしろ、修行した剣の腕を充分に生かせる機会に恵まれて感謝している」

アイザが慌てて否定していた。

「でも、戦わなくてすむなら、戦わない方がよいのです。めかけも疲れてきました」

リーゼが珍しくへばっている。

「ロザミアは大丈夫なのか」

おれがたずねると、

「わらわは決して弱みを見せるわけにはいかない立場なのでな」と悲しそうに答えた。

「めかけはたまには戦わなくても良い相手に出会いたいです」

リーゼがへばっている。戦力にならない魔道士だが、リーゼなりに頑張つて戦ってくれているのはわかる。疲れもたまっているのだらう。

そんな時に出会つたのが、黄金巨人だった。

体が黄金でできた身長五メートルはある巨人である。動きは遅いが、パンチは痛そうだ。

「まこと、ちよつと目がおかしくなつたかもしれない。今、襲つてきている敵の様子を教えてくださいませんか」

アイザがそんなことをいつている。

「襲つてきている敵って、黄金巨人だが、黄金でできた巨人だ」

「そうだな。まちがいなく、あれは黄金でできているのだな」
アイザが夢でも見ているような顔をしている。

「あれは戦わなくてもいい相手ではないでしょうか。めかけにはそう思えます。動きが遅いので、走れば逃げられるのではないのでしょうか」

「何をいうのだ、リーゼ。あれこそ、まさに戦わなければならない相手ではないか。黄金だぞ。黄金でできているんだぞ。倒せば、金塊が山のように手に入るではないか」

アイザがきつくいう。

「ひええ、めかけは黄金なんて、重くて運べないのです」

「安心しろ。ここに行商を呼べばいい。一攫千金のチャンスだ」
アイザは嬉々としている。

「まあ、路銀が多いことにこしたことはないのだがな。わらわは資金に困ったことはないが」

「そうですね、ロザミア様。ロザミア様、あの黄金はわたしにいただけませんか。このアイザが一人で倒して参ります」

アイザがお金に目がくらんだ。大丈夫だろうか。

「うむ。黄金が欲しいなら、アイザ、お主、一人で倒して参れ」

ロザミアも気軽に命じる。

「待て。あの黄金は我輩のものだ。黄金が欲しければ、我輩より先に倒すのだな」

「何お、神さま」

そして、アイザと神さまが二人で黄金巨人に突っ込んでいった。

「いいんですかね、これで」

リーゼが心配している。

「まあ、お金がほしいのは皆同じじゃ。悪いことではあるまい」

「おれ、戦わないでいいのかなあ」

「はあ、めかけはあの二人が心配です」

リーゼの心配は的中し、まずは神さまが黄金巨人に殴られて吹っ飛んだ。とても、動けそうにないくらい痛がつている。

「ああ、ああ、神さまは、神さまなのに、金銭欲に溺れてますね」
「うん。本当にどうしようもない神さまだな、リーゼ」

おれとリーゼがのんびり話していると、

「へぶお」

アイザも黄金巨人に殴られて吹っ飛んだ。

「あ」

リーゼが小さく呟いた。

おれがアイザのところへ行ってみると、

「助けてくれ、まこと」

と、きれぎれの声でうめいていた。

これだから、お金に目がくらんだやつらは。黄金でできた巨人が弱いわけではないか。

しかたなく、おれが黄金巨人をぶった斬った。腹を真つ二つにして、首をはねると、黄金巨人は動かなくなった。

「うむ。よくやった、まこと」

ロザミアが褒めてくれた。

「この黄金は売り払い、五人で等分にしよう」

ロザミアがそう決めた。

街から行商が呼ばれ、黄金巨人の死体を回収していった。

すごく高い値で売れたのだという。

おれもリーゼも、日本円にして、五億円ぐらいの大金持ちになった。

教訓。弱いと思うな、黄金巨人。

「なあ、リーゼ」

「なんでしようか、救世主さま」

ぐっ、かわいい。リーゼの顔を見ていると、なんか、癒されるなあ。いかん、いかん、今はそんな浮ついたことを考えている場合ではないのだ。

「リーゼ、おれを元の世界に戻すことのできる高位の魔道士は、見
つかりそうかなあ」

これだ。どうしても、確かめなければならない。高位の魔道士が見つからなければ、おれは元の世界に戻れない。つまり、ずっと、こっちの世界にいることになる。

だが、平凡な高校生であったおれが向ここの世界でできることなど、たかが知れており、おれは別にこの世界に残ってもいいかなあ
と思い始めている。だから、あまり、真剣にリーゼを怒るつもりはない。

「ええと、それが、めかけにはさっぱり見つきりそうにないのです
明るい笑顔で答えられた。いや、怒ってはいけない。おれは、この世界に残っても別にかまわないのだ。問題は、それをリーゼに教えてしまってもいいかということだ。教えてしまったら、リーゼは頑張って高位の魔道士なんて探そうとしなくなる気がする。そういうものだろ、人って。必要もないのに努力したりなんかしないさ。
おれが「帰れなくてもいい」とひとこといえば、リーゼはここできっぱりと魔道士探しを辞めてしまうはずだ。

「めかけも、救世主さまのために、頑張っているのですが、どうにもならないのです。それを考えると、めかけの頭がパンクしそうです」

「いや、無理をしなくていい」

おれはいった。

「何の話だ」

ロザミアが近づいてきた。おれが異世界から来たことは、まだ、リーゼとおれだけの秘密だ。あえていえば、神さまも知っている。三人だけの秘密なのだ。

「それが、めかけたちは高位の魔道士を探しているのです。ロザミア様に心当たりはないでしょうか」

「そういえば、前にも、そんなことをいつていたな。試しに、帝国の魔道士協会に行ってみるか。この近くにあるはずだ。高位の魔道士などがいるとは、聞いたこともないが、わらわよりも事情に詳しい魔道士がいよう」

「本当ですか。とても、助かります。めかけから、心の底より感謝を申し上げます」

「気にせずともよい。ただし、そこは今では、スニーク帝国の支配下にある。わらわたちに協力してくれるとは限らないがな」

「それでも、充分です」

おれは、帝国の魔道士協会と聞いて、ちょっと心が躍った。元の世界に帰れるなら、返れる手段を知っておいた方が絶対に得だ。

「なぜ、こんなところに寄るのですか」

文句をいうアイザを放っておいて、おれたちは、帝国の魔道士協会に行ってみた。

わりと大きな街の中にあつた。大きな建物だった。

「わらわの顔を知っている者がおそらくおるであろう。展開しだいでは、もめるかもしれん。覚悟しておくのじゃ」

初めて見るリーゼ以外の魔道士に心を躍らせて、おれは魔道士協会のドアを開けた。

「誰だ」

最初の部屋は、かなりの大部屋だった。そこにいる男から声が飛んできた。身元を聞かれている。なんと答えようか。

部屋の中にいる男たちは、黒いローブを着ていた。女も混じっているが。

「まことといます。西の方から旅をして来た者ですが」
「何の用だ」

困った。なんと説明したらいいだろうか。思い浮かばない。ここはリーゼに任せよう。

「リーゼ、説明を頼む」

おれが促すと、リーゼがドアを通って、入ってきた。そのまま、ロザミアも、アイザも、神さまも、中に入る。

「では、めかけが説明します」

大部屋の魔道士たちの視線がリーゼに集まった。

「誰か、神さまをたぶらかすほどの高位な魔道士をご存知ありませんか？」

意外な質問だった。おれは絶句した。神さまを騙さないと、おれは元の世界に帰れないのか。というか、騙す相手である神さまならすぐそこにおいて、この話を聞いているが。

リーゼは平気なのだろうか。

「ははははっ、さすがにそんな高位の魔道士は存在しないよ」

一人の魔道士が答える。

しかし、様子がおかしい。魔道士たちの視線はリーゼに注目されたままだ。ロザミアを見ている者もいる。ここはスニーク帝国の支配下なのだという。ロザミアの正体がバレたら、戦闘になるかもしれない。

「おい、あそこにいるのは、ロザミア姫ではないか」

「ああ、わたしも気になっていた。それより、お付きのリーゼという少女を見る。リーゼとは、まさか、西の村の天才少女リザヴェリータのことではないだろうか」

「わたしも気になっていた。あの少女は、西の村の天才少女ではないのか？」

魔道士たちの様子がおかしい。ロザミアに気づき始めているようだ。だが、魔道士たちの話題にのぼるのは、リーゼだった。

「めかけたちは、神さまをたぶらかせるほどの魔道士を探している

のですが」

リーゼがいう。

飛び跳ねるように、一人の魔道士が叫ぶ。

「まちがいない。あの少女は、天才魔道士リザヴェリータだ」

魔道士の叫び声が遠くまで響いた。

「神さまをたぶらかせる魔道士が、きみを除いて他に誰がいるというんだ！」

わけがわからなかった。ちょっと冷静に考えよう。おれを異世界から召喚したのはリーゼだ。そのリーゼは、神さまをたぶらかすことができるほどの天才魔道士だった。現に、神さまは、おれと入れ替わって、おれのいた世界に飛ばされていたのだ。

こう考えることはできないだろうか。つまり、リーゼが魔道士なのにも関わらず、普段、ろくに魔法が使えないのは、おれを異世界から召喚するという魔法を全魔力を注いで実行中だからであり、リーゼは、この世界で、一、二、を争うほどの天才魔道士。

「殺せ。ロザミア姫と天才魔道士だ」

魔道士協会の魔道士たちが魔法を使って襲ってきた。燃える。おれたちの周囲が、炎に包まれる。

おれは平気だが、リーゼはどうだ？

リーゼは魔道士協会の魔道士の魔法をくらっても、全然、平気だった。

「まづいな。やっぱり、戦いになったみたいだ、ロザミア」

おれはロザミアの指示を聞こうとした。魔道士を探すのは、おれとリーゼのわがままだ。全体の作戦を決めるのはロザミアだ。

「反撃しろ。わらわをロザミア・バッシュと知って逆らう魔道士を生かして逃がすな」

それを聞いて、アイザが魔道士に斬りかかる。

しょうがない。おれも戦いに参加する。

「神さま、こういうのをなんていうんだっけ」

「我輩にとって、敵か味方かはその時に参加しているゲームのルー

ルのようなものだ。成り行き任せ、勢い任せじゃよ」

ああ、恨みはないが、死んでもらおう。

神さまの剣は、例によって、一人にも当たることではなく、すべて空振りだった。

おれは八人の魔道士を殺した。

アイザとロザミアも、だいぶ、殺している。

リーゼは、杖を振って、殴っているだけだ。おれを召喚中であるため、他の魔法が使えないんだ。

「どうやら、逆らう魔道士は全滅したようだな。残った魔道士は、わらわ、このロザミア・バツシュに忠誠を誓うと受けとってよいのか！」

ロザミアが叱責した。

「ははあ。この通り、わたしたちに敵意はございません」

残った二人の魔道士は平伏した。今、魔道士協会にいる魔道士は、残りはみんな死んだようだ。

「わらわがここに来たことは、他の街の魔道士には知らせるな」

ロザミアが命令して、その場は収まった。

15 (後書き)

すいません。今まで、毎日連載してきましたが、ついに力尽きて、毎日連載するのが無理になりました。

5月7日からは毎日の更新はありません。

終盤の構想は練ってあるのですが、全部で九万字くらいの文庫本一冊くらいにまとめようと思っており、それには、

まだ終盤を書くわけには行きません。終盤までのつなぎとなる

中盤の構想が出来上がるまで、連載は中断、あるいは、不定期になります。

申し訳ありません。どうか、次の更新、および、最終回まで見捨てないでください。わたしはこの小説を完結させるつもりでいます。

旅をしていて、ふと気づいたことがある。とても奇妙なことに思えるのだが、確かにおれは何度も目撃している。

というのも、リーゼは、休憩時間になると、時々、服を脱ぎだし、全裸になって走りまわっているということだ。

ロザミアも、アイザも、神さまも、その奇妙な行動に気づいてないらしく何もいわない。おれ一人が、その奇態な現象を目で追っている。

その日も、リーゼは休憩時間になると、マントを脱ぎ、靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、上着を脱ぎ、下着を脱ぎ、全裸になったのだった。なんと、透き通るような肌におっぱいが丸出しではないか。小柄な体のわりに、くつきりとくびれた腰の曲線が美しい。大きいとはいえないが、小さいともいえない形のよいお碗形おっぱいが双丘をつくっている。その先には小さくて薄桃色の乳首が見える。乳輪はないに等しく小さい。そして、下半身も、はつきりと見えている。

そのリーゼがてくてくてくと目の前を走っていくのだ。見るなどというのが無理だろう。本人の顔はすごく解放感に満ちた笑顔で、こちらに向かって走ってきたと思ったら、方向を変え、自由気ままに走りまわっている。

ロザミアが

「のん気なものだな」

などと平常心のひとつことをつぶやいている。不自然に思わないのだろうか。この世界では当たり前のことなのだろうか。

走るたびにおっぱいが揺れている。それがたまらなく、おれのいちもつを刺激する。リーゼのおっぱいが揺れるたびに、おれのあそこが血流を増している。

本人のリーゼは無邪気な笑顔で走りつづけている。

こっちに向かってきて、

「救世主さま」

などと声をかけてきた。

「ああ」

と、何気なく答えるのだが、透き通るような肌が美しくてしかない。

リーゼがただの少女ではなく、世にも貴重な天才魔道士だとわかったため、今日は思いきって聞いてみることにしてみた。

「リーゼは、その格好で走るのが好きなのか」

ああ、おれはダメな男だ。なんと無粋なことばを選んでいるのだろう。リーゼが全裸なことなど、そつとしておけばいいではないか。それをおれは、なんとという危険な爆弾を刺激しようとしているのだろう。

「はい、めかけはこうして走りまわるのがいちばんの気晴らしなのです。とてもいい気分です。これはめかけの特権なのです」

そうなのか。触ってみてもいいかなあ、とか思ったりした。

それで、思いきって、聞いてみた。

「リーゼ、触ってもいいかな」

「今はダメです。救世主さま、今はリーゼの集中力を高めるための訓練中なのです」

「その格好で走りまわるのが訓練なのか」

「はい。めかけにはそうなのです、救世主さま」

そうか、訓練だったんだ。おれは納得しかけていた。

「いや、やつぱり、それは天才魔道士特有の訓練なのかな。あまり、この世界でも、他の人で真似してる人はいないのだが」

「めかけは、天才じゃないですよ」

「ああ、うん。そうだね」

おれは困ってしまった。こんな嬉しいサーヴィスがついているとは。天才魔道士と一緒によかった。

「他の魔道士でも、そういうことする人いるの？」

「ええ、いませんよ。これはめかけの子供の頃からのくせです」

ちっ、他の女魔道士も同じならよかった。

走りまわるリーゼをじっと観察する。全身無垢の生まれたままの姿だ。

「おれも脱いでいいのかな」

などと口走ったのが失敗だった。不自然ではないか。おれは服を脱いでいったい何をするつもりなのか。

淡い期待があったりしたのだが、それは思わぬ形で崩れ去った。

リーゼの顔がみるみるうちに真っ赤になったのだ。全身がほんのりと赤身を帯びた。

何が起きたのだろう。

おれには不思議だったのだが、リーゼがいった。

「またしても想定外なのです。めかけはうっかりしていました」
下腹部を押さえて座り込んでしまった。

おれにはわけがわからなかった。

「救世主さまには見えていますのですね」

「何が」

「めかけの肌です」

「うん。そうだね」

今さら何をいつているのだろう。不思議で仕方ない。

「みんなに丸見えじゃないの。すっばんぼんで」

リーゼは小さな声で否定した。

「ちがいます。救世主さま、めかけは魔法で姿をごまかしているの
で、普通の人には服を着ているように見えるのです」

おれは少しわけがわからなかった。

「じゃあ、ロザミアたちには、裸になっているのが見えないのか？」

「そうです、救世主さま」

「神さまにも？」

リーゼは首をかしげたが、

「たぶん、見えていません。見えるのは、世界で救世主さまただ一人です」

と答えた。

なんとという幸運。

「あの、気にしなくていいから、おれのことは
いかにごまかすか。現状維持を断固として続行しなければなら
ない。」

「めかけはどうしたらいいでしょう」

「訓練をさぼるのは、おれの召喚が不安定になる恐れがある」

ことばが滑らかに出てきた。なんとという強攻策。

「今までどおりにしたまえ。これは命令だ。でなければ、おれの命
が危険かもしれない」

脅迫。なんとというわがまま。この透き通った肌と、お碗形のおっ
ぱいを見るがために。

「はい、救世主さま。めかけは命令に逆らいません」

うむ、それでよいのだ。作戦は成功だ。

少し気になったので余分なひとことを聞いてみた。

「それで、リーゼは、こういうことをどう思っているのかな。とい
うのは、不純異性交遊について」

おれはなんとアホなことを聞いているのだろう。

「それが、めかけは子供の頃から魔法の勉強ばかりしていたので、
男女の問題はまったく知らないのです」

うむ、つまり、清純な少女が素っ裸で走りまわっているのだ。お
れは一向にかまわない。

それからも時々、リーゼは特殊な訓練をしていた。

16 (後書き)

なんとか、今日の更新はできた。

いつ更新が途切れるかわかりませんが、

途切れても、できるだけ早く復旧したいと思います。

西の州都を攻めることになった。例によって五人で攻める。五人で城攻めだ。相手に警戒されないため、その方が攻めやすい気がする。とロザミアがいうからである。

突然の思い出したような説明で恐縮だが、アイザは赤髪である。リーゼ、ロザミア、アイザが並ぶと、黒髪、金髪、赤髪と美しい色合いになる。おれと神さまも黒髪である。

「城主に会わせてもらおう」

ロザミアが城の門番にいうと、

「城主さまに謁見の申し出ですね。承りました。どうぞ、お通りください」

と通された。

「面白い展開だな。案外、この城の君主は人徳があるかもしれない。できれば、生かして恭順させたいが。だが、さすがに、わらわの顔を誰も知らないなどということはあるまい」

ロザミアはちよつと嬉しそうだ。

だが、どんな下賤な人民とも会う城主には、腹黒い謀略があったのである。

城の正面廊下を歩き終わると、二階へ登る階段があった。階段を登ると、廊下に血がついていた。

机があり、書記官が座っている。

「この城を訪れた者は皆、自分の持っている財産をすべて記入してください」

案内してくれた兵がそんなことをいった。へへへと顔が笑っている。

「そんな面倒なことをするのか。すべての財産など書いていては日が暮れるわ。そもそも、わらわは覚えておらん」

「主だったものだけでけっこうです」

そういう話だったので、ロザミアは、「主だった財産はすべて持ち歩いておる。わらわが持っているものですべてじゃ」

と答えた。ロザミアは二つの城という領地を持っているが、それを正直に書くほど愚かではなかった。

「それなら、そうお書きください」

書記官がいった。

『持ち歩いているものだけ』

そう書かれた。

「めかけもです」

リーゼがいった。

「おれもだな」

おれがいう。

アイザは、

「山小屋を一軒持っているのだが、ちゃんと書くべきだろうか」と悩んだ。

「好きにしる」

とロザミアにいわれ、アイザは正直に『山小屋』と書いた。

「おい、神さま、『全世界』とか書くなよ」

「我輩、嘘はついておらん」

「そうはいつでもなあ」

おれとリーゼと神さまでもめたが、結局、神さまは『全世界』と書いた。

謁見する者の財産を調べて、どうするかどうかと思っていたら、扉をくぐり謁見の間に入ったおれたちはすぐにわかった。ばたんと後ろで扉を閉められる。たかりだ。

「よく来てくれた、我が城へ」

椅子に座った城主はそういった。おそらく、決まりどおりの決まりを口上として述べる。

「実はな、客人よ。この城を訪れた客人からは、すべての財産を我

々に寄贈してもらおうことになっている」

ロザミアがうんざりしていた。善君かと思ったら、とんでもない悪者だったようである。

「この者たちの財産は、持ち歩いているものと、山小屋と、全世界だそうですね」

書記官からの使いが読み上げた。わははは、と笑う城主たち一堂。「残念だが、あきらめてもらおう。今から、お主たちの所持品と山小屋と全世界は我らのものだ」

「全世界だそうですね、閣下」

「わははは、全世界か。これで、今からわたしは全世界の所有者じや。な、わけがあるかあ」

城主が使いに怒鳴った。

げらげらげらと、立ち並んでいる兵たちが笑う。

「わらわたちから金品をまきあげようというのか。とんでもない暗君がいたものだ。わらわは亡きルドルフ13世の次女ロザミア・バツシュじゃ。今から、貴様らの悪政を廃し、この城と領土はバツシュ帝国領とする」

ロザミアが剣を抜いて、城主に突きつけていった。

「なに？　ロザミア姫だと！」

城主と兵士が目を丸くして驚いた。

「かかれ、アイザ、まこと」

はいはい。この間抜けな城主たちは、名のらなければロザミアがロザミアだと気づかなかつたんじゃないだろうか。そんなことを思いながら、おれは走って、城主のそばに立っていた巨大な棍棒を持っていた巨人をぶっ殺した。

次の瞬間には、城主の体をアイザが斬りおとしていた。

「わああああ」

兵たちは動揺していた。

「降伏せよ。城主は死んだ」

ロザミアが叫んだ。

「うるたえるな。我らには魔族がついている」

敵の指揮官が突撃の命令を出した。おれたち四人で、その部屋のを全兵士を殺した。

三十分ぐらい斬り合っていたと思う。四十人くらいいた敵兵士は全員死んだ。

「神さまが倒した敵は今回もゼロと」

「ぎいい、悔しいいい」

アイザと神さまのいつものやりとりだ。

「この城のどこかに魔族がいるらしいな」

「見つけるのは難しい。とりあえず、勝ち戦だ。魔族が出てきたら、おれが相手をするよ、ロザミア」

「うむ、わかった。アイザ、リーゼ、神さま、急いで、この城と領土がバツシユ帝国のものになったことを布告せよ」

「わかりました」

そして、西の州都を占領したのである。逆らう敵はまだ潜んでいゑるはずで、まだ油断はならなかった。

おれたちは、西の州都の城の寝室を勝手に使って眠っていた。城の役人たちは、バツシユ帝国に再忠誠を誓うことになったので、従う者、逆らう者で、混乱していた。役人同士で争っているらしい。事態は一晩で収まりそうになかったため、おれたちは順番に眠ることにした。どんな緊急事態でも睡眠をしっかりとること、それがロザミアの作戦だった。毎日の体調管理を怠っては勝利はないことを知っているのだ。

おれとリーゼと神さまが先に眠って（驚くことに神さまも眠るのだ）、六時間たって起きると、今度はロザミアとアイザが眠った。夜である。ロザミアはおれにしつこく警告した。

「魔族に注意せよ。まだこの城に潜んでいるはずじゃ」と。

だが、広い城を探し歩くのも面倒くさい。役人たちに聞いても、魔族がどこにいるのかわからないという。だが、役人たちも、魔族がまだこの城にいることを隠さなかった。

夜である。寝室の窓を、魔族が浮かんでいた。ラミアだ。窓の下を見ると、ラミアが十五匹いた。全部で十六匹。

ラミアとは、蛇の下半身をした上半身は裸の女の魔族である。かなり、高度な魔族で、人を惑わす歌を歌い、呼び寄せて食べてしまうという。非常に高い魔力をもっているという。その視線を見ると石になることもあると、リーゼはいう。

ロザミアとアイザは眠っている。正直、魔族の相手はあの二人には無理だ。おれが戦うしかない。

「ねえ、リーゼ。おれって、窓から飛び降りても大丈夫だと思う？」「めかけが思うに大丈夫です」

おれはちよつと迷った。リーゼをこの部屋に残すか、連れて行くかである。下手に離れた方が危ない。

「よし、リーゼ、捕まれ」

「えっ、救世主さま、なんですか？」

おれはリーゼを抱き寄せた。ちよつと顔を赤らめるリーゼ。

「飛び降りるぞ。リーゼ。敵は、中庭だ」

「はい、救世主さま」

おれはリーゼを抱きしめたまま、窓を開けて、片手で剣を抜いて、宙に浮いている一匹のラミアを一撃で斬り殺しながら、飛び降りた。着地する。まるで、ふわっと浮いたようにおれは着地した。

「なんだ、今の着地は？ リーゼの魔法？」

「めかけは何もしていません。救世主さまの力です」

そうか。そうなのか。

おれはリーゼを降ろして、立たせると、ラミアの群れをにらんだ。「一匹、やられたぞい、皆の衆。あの男、相当な手練れじゃ。人間と思つて侮らぬ方がよさそうじゃ」

「この城を渡すわけにはいかんからもう。あの男、どれほどの腕じゃ」

「魔王様から聞いておるところによると、ロザミア姫の一行には神がついているらしい。あの男が神ではないのか」

「ならば、気をつけるのは、あの男、一人じゃな。まずは娘の方から殺してしまおう」

さすが、魔族が十五匹、おれの正体がわかつて臆することがない。本気でおれに勝負を挑むつもりだ。勝てると思つているのか、このおれに。うぬぼれているのか、あの魔族たちは。

最優先することはリーゼを守ること。急いで、ラミア十五匹を倒してしまわなければ。

おれは走って突撃して、目の前のラミアを一撃で斬り殺した。世界が変わる。

「邪神封印」

ラミアの一匹がいった。おれはびっくりした。おれの動きが一瞬、ほんの一瞬だが、止められたからだ。その一瞬で、リーゼを別の一

匹が爪で引き裂こうとする。やばい。おれはリーゼを守れなかった。油断していた。ラミアをあまく見ていた。神の力を手にしたおれが負けるわけがないと思っていた。おれの間隙をつくことなど、できないはずだった。

「燃えちやえ」

ぼうつ、とリーゼを襲ったラミアが炎に包まれた。リーゼが魔法を使い、ラミアを燃やした。炎はなぜか、おれの体から飛んでいった。

動けるようになったおれは、リーゼのもとに走って帰り、リーゼを襲ったラミアを一匹、斬り殺した。世界が変わる。なんだか、すごく力が抜けた気がした。

「大丈夫か、リーゼ」

「危なかったです。でも、めかけはいざとなったら、救世主さまから魔力を借りて使うことができますのです」

そうだったのか。今、力が抜けた感じがしたのは、リーゼがおれから力を借りたからか。

危険だ。

おれは自分の未熟さを反省しなければならない。

「危ない目にあわせて、ごめんな、リーゼ」

「めかけは大丈夫です。救世主さまが謝ることではないのです。救世主さまは世界を好きに作り変えていいのです。めかけなど、見捨てようが、殺そうが、自由にしてください」

「そんなわけにいくか」

おれは怒鳴った。リーゼを殺させるわけにいくか。

「何を油断している。くらえ、神よ。邪神封印」

残った十三体のラミアがいつせいにおれに邪神封印という魔法をかけた。

おれは真っ白な空間の中に閉じこめられた。動けない。

おれの目の前で、リーゼが殺されようとしている。その風景がおれには見えた。おれの体は動かない。リーゼは、十三体の魔族を前

に一人つきりだ。一瞬で殺されるだろう。

ラミアはすぐにリーゼを殺そうとしたのがわかった。

おれは、力を封印されて、リーゼとのつながりが断たれたのがわかった。

リーゼの召喚魔法が途切れるのがわかる。

リーゼはおれを異世界から召喚するという魔法が途絶えたことを知った。

「ふふふふつ、神が、油断したな。我ら魔族が、神に対して無策だとも思ってたか。なあ、小娘。神に守られなければ、貴様など、一瞬で殺されるのじゃ。死んでもらおう」

ラミアが笑って爪を引つかこうとした。

その時、おれは気づいた。リーゼの魔力が解放されていることに。神さまをたぶらかすほどの天才魔道士の魔力が自由になったことに。めかけに手をかけるつもりかえ、お主ら

リーゼの声は低い怒声であった。おれとつながりを断たれたことで、明らかに怒っている。

「魔族ごときがめかけに適うとも思ったのかえ」

「ひいつ」

ラミアが後ず去った。リーゼの魔力の巨大さに恐れをなしている。

「燃えろ」

十三匹のラミアが燃えた。

「溶ける」

十三匹のラミアが溶けた。

「消えちゃえ」

十三匹のラミアが沸騰した。

リーゼ一人で十三匹の魔族を倒していた。

「うおおおおお」

おれは力を入れて、邪神封印を解いた。

再び、リーゼの魔力がおれをとり込むのがわかる。

おれが邪神封印を破るまで一分くらいだっただろうか。その間に、

リーゼの本当の姿を見た。

「大丈夫だったか、リーゼ」

おれは必死に声をかけた。

「はい。よくぞ、お帰りくださいました、救世主さま」

リーゼがいつもの笑顔で笑った。

おれはリーゼを抱きしめた。自分が情けなくて、情けなくて、しかたなかった。神の力を与えられて、女の子一人守れない男がどこにいる。おれは最低だ。最低な大バカヤロウだ。

あの邪神封印で封じられていた時間、いつリーゼが殺されてもおかしくなかった。

「ごめん。ごめん、リーゼ。こんな情けない救世主でごめん、リーゼ」

おれは情けなくて涙が出てきた。

「泣いているのですか、救世主さま」

「うわあつ、うわあつ、ごめんよ、リーゼ」

無力なおれは、どれだけ有利なゲームをリーゼに与えられていながら、どんな失敗をすれば気がすむのだろう。おれに神の代わりなど勤まるわけがない。おれにその資格はない。

おれは地面に伏して泣いた。今のおれに、リーゼに触れる資格などあるわけがない。

泣いた。泣いた。生まれて初めて嗚咽して泣いた。何時間もおれは嗚咽していた。

18 (後書き)

最終回にしてもよさそうなぐらいの盛り上がりです。
この回にこのネタを使ってよかったのか悩みますが、
自信のある回です。

おれは、あっさりした性格だ。一晩すると、けろりと昨晚の失敗は忘れた。というか、それを乗りこえられるだけの成長をした気だった。

気をとり直していこう。

魔族が退治されたことを知ると、西の州都はバッシュ帝国の領土になることに反対するものはいなかった。

おれたちは三日ほど、その城に泊まっていた。ロザミアが信頼できる領主を選ぶのに必要だった時間だ。本当は一刻も早く、次の城に進軍したいらしい。

西の州都は大陸の八分の一の領土を支配する一大拠点なので、ここを攻略できたのは大きかった。

おれとアイザが、いちばん政治力の高い人物がだれかの評価を討論していると、そんなものはロザミアが一蹴した。

「必要なのは、勇気と忠誠心だ。政治力など、部下に任せればいい」

このあたりを見抜く判断力はさすがロザミアだった。おれでは、ロザミアほどうまく統治できないようだ。おれは、自分がいかに世間知らずなのかを思い知らされてしまった。

ちなみに、リーゼがいうには、必要な能力は、救世さまに助けを求める速さだそうだ。ロザミアが一蹴した。

神さまの意見は、サイコロに任せればいいというものだった。運任せで政治をしても、あやつらの能力ならサイコロと変わらないのだそうだ。ロザミアが一蹴した。

そして、いちばん忠誠心の高い者を領主に任命して、西の州都を統治させた。その領土の攻略も任せた。

二番目に忠誠心の高い者を将軍に任命して、独自に軍を率いて帝都を攻略するように任せた。

例によって、ロザミア姫は、お忍びで五人で敵国へ突撃するのだ。

うまくいくかはわからないが、四日目、おれたちは、西の州都を旅立った。

旅立って二日目、死霊使いに襲われた。死霊使いは、死霊の騎士を操っていた。

おれが剣を抜くと、アイザが指示を出した。

「まことは死霊使いをやれ。わたしが死霊の騎士をやる」

おれはその指示に従った。

死臭のする死霊使いを頭から叩き斬って、一撃で倒した。死霊の騎士の方を見ると、アイザが負けていた。

慌てて、おれは、死霊の騎士を剣で斬り倒した。

「大丈夫か、アイザ」

「……」

返事がなかった。血をべつとりと流して倒れている。

「たいへんだ。死ぬかもしれない」

おれはアイザを抱き起こして、みんなに叫んだ。

「どう手当てしたらいいんだ？ おれは手当ての仕方也不知道」

「わらわに任せろ」

ロザミアが布を巻いて、アイザの血を止めた。アイザはひとこともしゃべらなかつた。気を失っているのかもしれない。

「死んではいない。安心しろ。助かる傷だ」

ロザミアがいった。

おれは頭を抱えた。なんてことだ。今度はアイザを守れなかつた。おれは思っていたより、ずっと無力だ。

その晩、アイザを宿屋のベッドに寝かせると、ロザミアがいった。「これでは仕方ない。まことはアイザの代わりにわらわの付き人をやってくれないか。少し手伝ってもらうことがある」

「付き人というと」

「うむ。今までは、アイザに頼んでいたのだが、数日、アイザは動けそうにない。アイザが元気になるまで、しばらくかかりそうだから、その間、どうしても外せない儀式をまことに手伝ってもらいた

い

「儀式？」

「隣の部屋に来てくれ」

おれはアイザの寝室を出て、隣の部屋でロザミアと二人きりになった。

なにをするのか見ていたら、ロザミアが服を脱ぎだした。

な、なんだ！ 何が始まるんだ。

おれが驚いていると、ロザミアは全裸になった。服と持ち物はすべて、部屋の隅に置いてしまった。

「わらわの背中に文字が描いてあるだろう。それに異常がないか、確認してほしいのだが」

ロザミアのお尻がみえる。形のよいお尻だ。長身のロザミアは後ろから見ても抜群のプロポーションだった。

そして、いわれたとおり、背中に文字が描いてある。ロザミア・バツシュという文字になるように絵が描いてある。文字になるように絵を描いたのであり、不思議な描き方だった。

「わらわの背中に文字が描いてあることは決して誰にもいってはならん。本物の皇族を表わす証なのじゃ」

うん。うつとりするほど、幻想的だ。皇族の使う本式の文字を初めて見た。それは美しいものだった。

「入れ墨だよね、これ。こういう絵文字の入れ墨が描いてある人は、ロザミアしかもう生き残っていないの？」

「そうじゃ。わらわが最後の一人じゃ。これを見れば、大陸中の全神官がわらわに跪く。聖書に描いてある聖人の背中の絵文字と同じなのじゃ」

へえ。この世界の聖書がどういう本で、どういう聖人がいるのかは知らない。

さて、困ったのは、この後だ。この後、どうなるのだろう。ま、ま、ま、前を見てみたいな。とか、思っていたりするのだが、許されることなのだろうか。

おれは少し考えた。

そして、絶対に前も見なければならぬという結論に達した。体の前面に、どんな絵文字が描いてあるのか、確かめなくてはならないからだ。普段は服を着ていて見れない。

おれは、足をロザミアの前へと進めた。

顔を見るのは恥ずかしいので、体を見る。あそこに毛が生えており、大きなおっぱいがある。絵文字はなかった。

「ふふつ、合格じゃ、まこと。わらわの前姿を確認しない付き人用はない」

どつと汗が出た。安心したと同時に、心の中が読まれたかのようだ。思いきって、顔を見る。

にやつと笑ったロザミアの顔があった。美しい。

「それだけの度胸があるなら、正式に今日からまことはわらわの付き人じゃ。風呂の手伝いをせい」

は？ なんと？

「風呂の手伝い？」

おれが不思議に思って聞くと、

「そうじゃ。わらわは一人で風呂に入ったことがないのじゃ」と答えた。

思い出してみれば、アイザに会うまでは風呂に入らなかったし、アイザに会ってからは、ずっとアイザと一緒に風呂に入っていたよな。

「お体を、洗つてよろしいので」

なぜか、口調が丁寧になってしまった。

「当然じゃ。そのための付き人じゃろ」

これは、嬉しい。素直に喜んでよいんじゃないだろうか。

というか、あの時、おっぱいを見に、前にまわってよかった。あの決断がなければ、お風呂を逃していたかもしれないのだ。

「さあ、洗ってくれ」

一度、湯舟につきり、体を濡らしてきたロザミアがいった。おれ

もすでに服を全部脱いでいる。裸の男女がお風呂に一緒だ。

冷静を装って、いかにも、女性の裸を洗うのに慣れているかのよう
に平然と、タオルに石鹸をつけて、ロザミアの背中を洗い始めた。
「わらわはきれい好きなのじゃ。当然、隅々まで洗うのじゃぞ」

「ごふつ。ありがたいご命令。思いきって、背中の方に、おっぱい
へと洗う場所を動かす。ぼよんぼよんして柔らかい。」

これから、これが毎日、つづくだと！
考えられんことではないか。

おれの頭を一瞬、リーゼの裸が通りすぎた。リーゼは憧れの人、
ロザミアはご主人様だ。大丈夫。おれの中で、二人を両立させるこ
とに何の問題もない。

「まこと、おっぱいばかりを洗ってないで、全身を洗ってくれ」
「は、はい」

声がかすれた。ロザミアのおっぱいの下を洗い、腹から、足、腕、
そしと、股へと腕が伸びた。

実は、おれは童貞である。妹のあそこは見たことはあるが触った
ことはない。つまり、ロザミアのあそこを触るのは、生まれて初め
てなのだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

なぜか、おれの方が声があえぎ声になり、お湯をつかって、ロザ
ミアの秘部をしっかりと洗った。生まれて初めて、マンカスをとる
という行為を行ったのだ。それは白く確かにロザミアのあそこにつ
いており、誰かがとらなければならぬものだ。

だって、ロザミアは自分で自分の体を洗ったことがないんだもの。
将来のロザミアの旦那さんのためにも、あそこはきれいにしてお
かないといけない。おれは真面目に真剣になった。

そして、ふと、気がついた。クリちゃんを弾いたらどうなるだろ
う。

怒るかな。怒らないかな。

おれは、さも、仕方ないかのように、と、おれ一人が思いながら、

ロザミアのクリちゃんを弾いた。

「あん」

ロザミアがあえいだ。

それだけなら、よかったものの、ロザミアの口から出てくることは信じられないものだった。

「まことはそこを攻める派か。城の侍従は積極的に刺激するのだが、アイザはほとんど刺激してくれないので、悩んでおったのじゃ」

おれは何と答えてよいか、頭が混乱したが、何か答えなければならぬことは理解していた。

「その侍従は男で？」

「女じゃ。男の侍従はまことが初めてじゃ」

おれはどつと安心した。

「攻めた方がよろしいのでしょうか」

「うむ。なんでも、胸を大きくする効果があるらしい」

それは、

「それは大事なことですな」

「そうじゃ。大事なのじゃ」

おれは次の段階へと移った。重要な確認をしなければならぬ。体で確認するか、ことばで確認するか、迷ったが、ことばで確認した。

「ロザミア様は、処女膜はありますか？」

殺されるかもしれないと思った。

「ふふつ、処女に決まっておろう。嫁ぐ前の皇族じゃぞ」

触って確かめてみると、確かに膜があった。おれはすごい経験をしている。

これから、これが毎日。

鼻血が出た気がして、ぬぐってみると、鼻水だった。

おれとロザミアが風呂に入っていると、コツコツと風呂のドアを叩く音がする。

「何ごとじゃ」

ロザミアが厳しく叱責すると、物怖じしないリーゼの声が返ってきた。

「めかけもお風呂に入れてくれたら、アイザの怪我をすぐに治す方法を教えます」

なんだと！

うーむ、おれは悩んでしまった。

ロザミアも悩んでいる。

「どう思う、まこと。罨じゃるか」

「罨？ リーゼは罨を使うような女の子ではありませんよ」

おれが焦ってというと、ロザミアは懐疑の声をあげた。

「じゃが、わらわの背中を見せても信用できると思うか」

確かに。ロザミアにとって、命をかけるかのような決断の場面だ。だが、おれははっきりと聞いた。

「リーゼを疑うくらいなら、おれは死んでもいいです」

ロザミアは目を丸くして驚いていた。皇族として、人の極限状態を頻繁に眺めてきたロザミアだが、女のために命を投げ出すと即決した男は初めてだった。

「まことがそこまでののなら、よいのだろう」

それから、意地悪そうに聞いた。

「じゃが、わらわは慣れておるからよいとして、年頃の男や女が裸を見せ合ってよいものかな」

すると、その声が聞こえたらしく、リーゼから声がかかった。

「あら、めかけはすでに裸を救世主さまに見られるのは慣れております」

「何！」

ちよつとロザミアが怒ったようだった。

「いつ、見られておるのじゃ」

「めかけは魔術で裸を隠しているのに、救世主さまには魔術が効かないのです」

「そういうことか」

おれはどうなることか、はらはらどきどきしていた。これが修羅場？ 三角関係？ こんな複雑な駆け引き、おれ、できないよう。

「そういうことなら、わらわはリーゼと一緒に風呂に入るのに一向にかまわないが」

「ええ、おれもかまいません。ですが、アイザの怪我をすぐに治す方法とは何でしょう。それがわかりません」

「なるほど。確かに、わらわにも想像がつかん」

そして、ロザミアはドア越しに声を張り上げた。

「リーゼ、アイザの怪我を治す方法をすぐに申してみよ」

答えはおれの想像の斜め上を飛んだ。

「はい。アイザの傷は、救世主さまが回復魔法を使えば、治るはずです」

はい？ なんで、おれがそんな回復魔法なんて使えることになっているの？

おれはわけがわからなかった。

「まこと、お主、回復魔法が使えるのか？」

「ええ、そりゃあ、やるのは初めてですけど、やってできないことはないと思います」

おれは答えた。

「よし、ならば、本当に怪我が治ったら、一緒に風呂に入ろうがばつと、ロザミアが湯舟から出た。

おれは簡単に略装で下着だけ着ると、リーゼに聞いた。

「回復魔法ってどうやってやるの？」

「めかけが思うに、手を当てる念じれば治ると思います」

服を着たロザミアがじつと見ている。

おれは、重症を負い、ベッドに横たわるアイザの横に歩いて行って、傷に手を当てた。

治れ！

おれがそう念じると、アイザが目を覚ました。

「おや、急に体が軽くなったな」

「はははははははははは、本当に怪我が治ったわ」

ロザミアが笑っていた。嬉しいのだろう。

「なぜでしょうか。急に体が元気になった気がします。心配をかけるすみませんでした、ロザミア様」

「よいよい。今から風呂に入るからな」

「はっ、お風呂でございませぬ」

「それがな。これから、わらわとリーゼとまことと一緒に風呂に入ることになったのじゃ。アイザは神さまとでも一緒に入っておれ」
目が点になったアイザであった。

「な、ななな、なぜですとお、ロザミア様？」

アイザがとり乱している。

「アイザ、お主が怪我をしている間にそう決まったのじゃ。わらわは約束は守るぞ、リーゼよ」

「はい、めかけも緊張しております、ロザミア様」

「では、一緒に風呂に入るか」

ロザミアがおれとリーゼの背中を押す。悪い気はしない。

「じゃあな、アイザ、神さま」

おれが声をかけると、アイザはとり乱していた。

「どういうことだ、まこと。どんな策をろうじた！」

「アイザ、お主の傷を治したのじゃよ。治るかどうかで賭けておったのじゃ」

「ロザミア様！」

アイザは絶望しているように見えた。

「我輩はアイザと一緒に風呂に入ればよいのかな」

神さまは何が起きても余裕だ。

「うわあああ」

アイザが叫んだ。

おれたち三人は気にせず、風呂に入ることにした。

おれがリーゼの体を洗っていると、

「何か不思議な気分になりますね」

とリーゼがいつていた。

その間に、ガラスと風呂のドアが開いた。裸のアイザが入ってきた。

「神さまと入るよりは、まことのがマシだ」

おれは鼻血が今度こそ出るかと思った。

リーゼの体を洗い、あそこを点検する。処女膜がある。クリちゃんを弾くと、

「むっ」

という。

つづいて、アイザの体を洗う。最初は照れて怒っていたようだが、だんだん大人しくなった。

またを広げると、

「何をするのだ！」

と怒ったが、

「当たり前のことだろ。みんな、やっているぞ」

というと、素直に股を開いた。ロザミアの手前、嫌がれないのだろっ。

アイザは男性経験があるだろうか。おれは汗がたらたら流れるのを感じながら、あそこに手をのばすと、処女膜が確かにあった。

「おかしなことを考えておらんだろっな、まこと」

「そんなことはない」

おれが断言すると、

「どうした？」

とロザミアが聞いてきた。

「答えるべきか」

おれがいうと、

「当然、答えるべきだろう!」

とアイザが怒った。

ならばいおう。

「アイザも処女でございますね」

「あはははははっ」

ロザミアが笑った。

「何がおかしいのですか、ロザミア様!」

さすがにここはアイザでも怒るが、

「そうか、アイザは処女か。あはははは」

「この三人はみんな処女です」

おれがそういうと、

「あはははは」

三人とも笑った。

とても楽しかった。

これから、これが毎日など信じられない。

おれたち四人が風呂から出ると、悟ったように平然と神さまは一人で風呂に入った。

神さまは何があっても平気だ。

五匹の大目玉と戦闘になった。大きな目玉に手足がついた変な怪物だ。五人それぞれが一对一で、大目玉と対決になった。

おれはいつものように、一撃で大目玉を斬りおとした。世界が変わる。敵が何か魔法を使った気がしたが、おれに効いた感じはなかった。

「いやあ」

少し離れたところでアイザの気合が聞こえる。アイザでもこの怪物なら倒せるだろう。

楽勝だ。もう、仲間がどんな怪我をしても、回復魔法で治すことができる。場合によっては瀕死の状態からでも蘇生できるだろう。もう、仲間の死を心配する必要はない。

いける。おれは無敵だ。

すぐにリーゼの相手の大目玉を斬り殺す。おれの速さは、敵より数段速い。

「へぶお」

神さまが相変わらずやられているから、神さまの相手の大目玉も斬り殺す。

次は、アイザとロザミア、どちらを助けようか。

と思ったら、少し様子が変だった。

「気をつける、まこと。この怪物、催眠の魔術を使うぞ」

ロザミアがいった。

ロザミアはまだ大目玉を斬り倒せないでいる。

アイザはどうだ？ アイザの様子を見ると、なんかこっちに向かってくる。

「大丈夫か、まこと。今にも死にそうではないか？」

アイザがいう。

いや、おれは全然平気だけど。

「まこと、実はわたしは、まことのことが大好きだったのだ」
何をいってるんだ、アイザは。

「まこと、わたしはまことを愛しているといってもいい」
な、な、な、な、なんと、突然、愛の告白をされてしまったぞ。

いくら一緒にお風呂に入っているからとはいっても、まだ、おれたちはただの旅仲間。共に戦う戦友ではないか。それ以上の一線を越えるというのか。

それはちよつと、気が、気が早くはないか。

おれにはリーゼがいるし、ロザミアというご主人様もいる。

「ちよつと待ってくれ、アイザ。お、おれを愛しているってどうい
うこと？」

「どうやら、催眠ですね」

リーゼがいった。

「なんだ、催眠か」

おれはほつと安心した。そんな告白されても、気持ちの準備ができていない。

「わたしの愛は海より深く、まことといるだけで天にも登った気分
なのだ。あいや、いわなくても、わかっている。まことがわたしを
好きなことはうすうす気づいていた」

頭、かち割つたるか、この女。

だから、おれにはリーゼとロザミアがいるのだ。

「わたしを抱きしめてくれ、まこと」

「何をいっておるのじゃ、アイザ。わらわに相談もなく、そのよう
な話をするとは、許さぬぞ。なぜ、わらわに相談もなく、そのよう
なことを決めるのじゃ」

ロザミアがいう。

アイザが近づいてくる。大目玉二匹は遠くで見ている。あの大き
な目玉で。あれの目が催眠を使うんだな。

と思っていたら、アイザが迫ってきた。

「まことはわたしとキスしたいのだろう。あ、いや、いわなくても

わかつている。まことがわたしを心の底から愛していることは、実は旅の最初から気づいていた」

「なんじゃと。わらわの許可もなく接吻など、許さぬぞ」

「ロザミアも催眠かなあ」

おれが聞くと、

「さあ、どうでしょうかねえ」

とリーゼが答えた。

「ロザミアもおれのことが好きなのかい？」

「バカをいえ。付き人などと結婚できるか」

どうやら、ロザミアは正気のようにだ。

「ロザミア様がまことに気があるのはわかっていました。ですが、ロザミア様はまことよりも、わたしを愛しておいでです。いや、これはいけない。女同士の禁断の恋。ああ、わたしはなんと罪深いのでしょうか。ロザミア様の心をたぶらかすとは」

アイザが高揚している。

「催眠で潜在意識がでてきたのかな」

おれが聞くと、

「いえ、ただの催眠でしょう」

とリーゼが答えた。

「うわ、ちよつとやめるよ。アイザ、くつつくなって」

おれがアイザを引き離すと、ロザミアもアイザを引っ張った。

「そうじゃ。わらわに許可もなく、まことと抱擁しようなど、けしからん」

「いい加減、大目玉を倒した方がいいかな」

おれがいうと、

「面白いから、もう少し見てみましょう」

とリーゼがいう。

「ならん！ このような醜態は見せること、まからのじゃ」

と、ロザミアが大目玉に突っ込んだ。

慌てて、おれもロザミアを追う。

「ああ、やめてくれ。わたしのために争わないでくれ。ロザミア様、まこと。わたしを取り合って、斬り合いなど」

アイザの妄言は放っておいて、ロザミアより早く、一匹の大目玉を倒した。

もう一匹の大目玉は、ロザミアが意地で倒した。

戦闘終了だ。

しばらく時間がたち、おれはアイザに聞いてみた。

「ねえ、アイザって、おれが旅の初めからアイザに気があったとか思っていない？」

「な、なんだ、まこと。突然の求愛か？」

「どうやら、正気に戻っているようだ。」

「おれは別に心の底からアイザを愛しているとか、そういうことはないと思うよ」

「何をいつているんだ。別にわたしだって、まことのことなんて、全然興味なんてないんだからね」

「ううむ。本音は計りづらい。」

「お主たち、くだらぬ話をしすぎじゃー！」

ロザミアに怒られてしまった。

「めかけも、くだらない話をしすぎだと思えます」

ああ、リーゼに嫌われる。それは、まずいよ。おれはどうしたらいいんだ。これは。

後で、どういいわけをしても、その日のうちに、ロザミアとリーゼの機嫌は治らなかった。大目玉、恐るべし。

ちなみに、神さまはあれから、毎日、剣術の訓練をしている。アイザが具合が悪い時は一人で剣を振っている。アイザいわく、見どころがない、らしいのだが、がんばってもらいたい。

ゴブリンの群れが襲ってきた。三十匹くらいいる。

やれやれ。戦闘はできれば、さけたいのだけど。一度は、回復魔法があるから、何が起きても大丈夫だと思ったけど、おれが上手に正確に的確に毎回、回復魔法を使える自信がない。回復魔法を使つたつもりが、ゾンビのようになつたらどうするのだ。

そう思うと、やはり、仲間が死ぬのは怖い。

「ゴ布林ごときに負けるわけにはいかんぞ。返り討ちにするぞ」

ロザミアが剣を抜く。

「ゴ布林って、弱いのか？」

おれが聞くと、

「油断ならない怪物にはちがいないが、弱い方であろうな」

とアイザが答えた。

おれは、一匹、二匹と、次々と斬り殺していったけど、ゴ布林が弱いのはよくわかった。

おれは安心して、七匹、八匹と倒したが、その時、信じられないことが起きた。

神さまがゴブリンを斬り殺したのだ。

おれは驚いた。神さまは、おれと入れ替わって、おれと同じ体をしている。その凡人であるおれの体を使って、どうやって、この異世界の怪物を倒すことができるというのだろうか。

「や、やった。我輩は勝利したである」

神さまも勝利を誇っている。これは、元の世界のおれの体がこの世界の怪物を倒せるほどに経験値を積んだことを意味する。

超意外なできごとだった。

「やったな、神さま」

「うむ。我輩、嬉しいである」

「といってる、神さまは二匹目のゴブリンに殴り倒されていた。

二匹目にはまだ勝てないらしい。」

「おれはリーゼと神さまの周りのゴブリンを剣を旋回させて、一掃した。」

「無理するな。神さま、今日はよくやったよ」

「ひええ、痛いぞござる」

「神さまは半泣きだ。」

「どうしたんだ、まこと」

「ロザミアが話しかけてきた。」

「それが、神さまがとうとう、一匹目の怪物を倒したんだ」

「おれが答えると、」

「何！ それは本当か。すごいじゃないか」

「と、ロザミアも喜んだ。」

「めかけが思うに、これはめかけの危機なのです」

「ん？ どうしてだ、リーゼ」

「おれが聞くと、」

「それはまだいえません、救世主さま」

「と不思議なことを口にした。」

「どうやら、アイザが最後のゴブリンを倒したところのようだ。」

「どうした、どうした」

「アイザが駆け寄ってきた。」

「それが、神さまがとうとう怪物を一匹やつつけたんだ」

「おれが説明すると、」

「本当か！ やったじゃないか、神さま。これで剣術を教えたわたしにも、教えがいがあったというものだ」

「と答えた。」

「我輩は成長したである」

「うん、うん、偉いよ、神さま」

おれはしきりに神さまを褒めた。

「神さまはめかけの想像を遥かに超えてすごいのです」
リーゼがいった。

「今日はちよつとした記念日だな。神さまの初勝利を祝って、祝杯をあげるか？」

「我輩はケーキの方が嬉しいでござる」

「それじゃあ、ケーキだ」

師匠のアイザの喜びも大きかった。

その日の晩は、宿場でケーキを買って食べた。美味しかった。神さまの初勝利。

おれは考えた。おれがリーゼによって謎の力を与えられなかったら、ゴブリンに勝てただろうか。

無理だろう。

神さまは、おれには不可能なことをやってのけたのだ。

それからも、神さまの連日の剣術の訓練はつづいた。

「振りが遅い。気を抜くな」

アイザの叱責が飛ぶ。

「はあ、はあ、はあ」

神さまはへとへとに疲れるまで剣を振っている。

「がんばるなあ、神さまは」

おれがリーゼにいうと、

「そうですね。神さまの根性は、めかけの計算外なのです」

「前にもいつてたけど、神さまの成長がリーゼの危機ってどういうこと?」

リーゼは悲しそうな声で答えた。

「神さまは、力を奪ったためかけを恨んでいるかもしれませんが。もし、神さまがめかけを恨んでいるのなら、めかけはあの根性でそのうち殺されるのです」

「そっかあ。リーゼも複雑だねえ」

「めかけの計算では、めかけの寿命が終わるまで、神さまが強くなることなどないはずなのです」

「うーん、おれにはよくわからないなあ。リーゼが神さまに殺されると、おれも力を失うのかな」

リーゼは軽く笑って答えた。

「それは大丈夫です。めかけに何かあっても、救世主さまは救世主さまのままです」

それは、安心だな。

リーゼが死んでも、おれの力で生き返らせられるだろう。おそろく。

「戦闘だ！ 怪物が襲ってきたぞ」

ロザミアが号令を發した。

慌てて、アイザと神さまは剣術の訓練をやめて、怪物に備える。
おれとリーゼも、戦闘態勢に入る。

襲ってきた怪物は、スライムだった。八匹いる。ゼリー状のねばねばした巨大な怪物だ。おれたちを包みこんで、消化しようとする。おれは、一撃でスライムを一匹倒した。世界が変わる。おれの攻撃は、このゼリー状の怪物にも効く。

「斬りにくいな、この敵」

アイザが苦戦している。

ふとみると、神さまがスライムをやっつけていた。

「おおおお！」

おれは喜んだ。

「何だ？ 何があった？」

スライムを倒したアイザが聞いてくる。

「神さまが倒した怪物二匹目」

アイザも破顔した。

「本当か。めでたいな、それは」

苦戦するロザミア、リーゼの加勢に入って、スライムを次々と倒していく。

神さまは二匹目のスライムも倒した。

「やるじゃないか、神さま」

「もう立派な戦力だな」

ロザミアがいった。

しばらくすると、森の奥からキングスライムが現れた。

「何？ あれ？」

おれが聞くと、

「やつらの親玉じゃ。気をつける。何倍も強いぞ」

とロザミアがいう。

「だったら、神さま、戦ってみるか？」

おれが提案すると、

「我輩、挑まれた勝負は断らないでござる」

と受けてたつた。

「おい、神さまじゃ、いくらなんでも、無理だろ」
アイザがいうが、リーゼは怯えていた。

「神さまは神さまなのです。あまく見ない方がいいのです」

「そうだ、神さまは神さまだぞ」

おれがいった。

「なんじゃ？ いったい、どういう意味じゃ？」

ロザミアが聞いてくるので、おれは正直に答えた。

「神さまは本当にこの世界を造った神さまなんだよ。今は魔法の力で力を奪われているだけなんだ」

「ふっ」

ロザミアは一笑にふした。

「わらわは、神を騙る聖人君子には、宮殿で山ほど会っておるわ。

その中に一人でも本物の神がおったなどとは思っておらん」

ロザミアには信じてもらえなかった。

「おおお、神さま、すごいぞ」

アイザが喜んでいる。

神さまが一人でキングスライムを倒したのだった。

「我輩の勝利でござる」

神さまが高々と剣を掲げた。

「おめでとう、神さま」

「めかけも祝福します、神さま」

「うむ、久しぶりに勝利の気分を味わったな。苦難を超えての勝利も、また、世の中にあつてしかるべき面白き娯楽じゃよ」

神さまは何やら深淵なことをふまえながら答えたようだった。

「ふふふふっ、これでわわらの直屬軍も、より一層、磨きがかかったことになるのう」

ロザミアが喜んでいた。

神さまの連日の剣術の訓練も盛り上がってきた。

「まだまだ、振りがブレているぞ、神さま」

アイザの指導は厳しい。

「ねえ、まだ、アイザは自分がこの五人の中でいちばん強いと思ってるの？」

おれが思いきって聞いてみると、

「そうだな。まだそう思っておる。まことは、隙だらけだしな。まだ負ける気がしない。わたしは、自分より強い男にしか抱かれるつもりはない」

ごふっ。思わず、息が変なところから出た。

それでは、おれはアイザを口説こうと思えば、いつでも口説けるではないか。

いけない、いけない。こんなことを考えていては。おれには、リーゼとロザミアがいるのだ。みだりに気をとられてはいけない。

しかし、アイザも捨てがたい美人だなあ。ああ見えて、意外にかわいいのだ。ブサイクか、かわいいかでいったら、かわいいの方に入るだろうなあ。

まあ、リーゼとロザミアはもつとかわいいのだが。

その日も戦闘があった。ゾンビに襲われたのだ。いつもどおり、軽くやつつけていると、またしても、歓声があがった。神さまがゾンビにも勝ったのだ。

すごいよ、神さま。

神さまはすでにバイオハザードをナイフだけでクリアするぐらいに強くなっているのだ。

ゾンビを退治していると、次の日には毒毒ゾンビが襲ってきた。

次から次へと、怪物が出てくるのがなくならない。スニーク帝国が怪物を飼いならして利用しようとしているため、怪物の方も積極

的に人間界に干渉してきているのだ。

ロザミアは、毒毒ゾンビにはかなり苦戦していた。おれが応援に入り、毒毒ゾンビを倒した。

「解毒剤なら、たっぷりあるからな」

ロザミアはいつていた。

神さまは一人で毒毒ゾンビを倒した。

「いやあ、最近の神さまは見ちがえるほど強くなったね」

「我輩、だんだんコツがわかってきたでござる」

「へえ、やっぱり神さまはすごいやあ」

おれは素直に関心した。同じ神の力をもっていても、神さまなら、その力の使い方はおれとは異なるのだろう。

神さまはおれと同じ体に入っているのに、怪物退治ができるなんて、中身が優秀だと思えない。

やはり、おれのような凡人とはちがう。

「気を抜くな。また怪物が襲ってきたぞ」

今度、襲ってきたのは、バジリスクが三匹だった。

おれたちは三手に別れて、バジリスクと対面した。おれ、アイザは一人で一匹を相手にして、ロザミアと神さまとリーゼで、残り一匹を相手にした。

「気をつける。目を見ると石にされるぞ」

ロザミアが叫んでいる。そんなこといったって、目を見ないで、どうやって戦うんだよ。

ロザミアの指示は非常に難しいように思えた。

おれは平気でバジリスクの目を見て戦ったが、石になることはなかった。いつものように軽く一撃でバジリスクを倒す。世界が変わる。

アイザが苦戦していた。本当に目を見ないで戦っているようだ。

ロザミアはもっと苦戦していた。バジリスクに引つかかかれるところを、神さまに防いでもらっている。

「がんばれ、ロザミア、神さま」

おれはそういいながら、アイザの手前のバジリスクを斬り殺した。そして、急いで、ロザミアの前のバジリスクに向かうと、驚くことに、神さまが倒していた。

神さまの剣がバジリスクの首をはねている。

「大丈夫か。石にならなくてよかったな」

「ああ、本当だ」

「リーゼが睨まれた気がしたのだが、よく石にならなかったな。運がよかった」

「めかけは魔法防御は高いのです」

「わらわも、石化を防ぐ飾りを身につけているのでな。正直、バジリスクの目を見てしまったが、石にはならなかった」

「我輩は、本当にバジリスクの目を見ずに倒したでござる」

「へええ、すごおい」

みんなが神さまを褒めた。

その日の夜、ロザミアが落ち込んでいた。肩を落とし、涙ぐんでいる。

「どうしたんだ、ロザミア？」

おれが声をかけると、ロザミアは答えた。

「いや、なに、気にすることではないのだが、やはり、落ち込んでなあ」

「なんだよ。何があったんだ？」

おれが聞くと、ロザミアは哀愁漂う横顔で答えた。

「実はな、わらわが思うに、神さまはすでにわらわより強いのではないかな？」

驚くべき告白だった。

ロザミアがそう思っているのなら、そうなのだろう。

「いいじゃないか。おれも神さまも、ロザミアに剣を捧げた剣士なんだからさ。ロザミアは指揮官なんだよ。指揮官としては、ロザミアがいちばん優秀さ。気にせず、戦いはおれたちにまかせておけよ」
ロザミアが体をもたれかかってきた。

「すまない。まこと。あまえてしまつて。でも、正直、ショックでな」

「神さまの成長はすごいよなあ。その分、おれたち五人の戦力が増しているってことなんだから、気にすることないさ。神さまは確かに、ロザミアに剣の忠誠を誓つたよ」

ロザミアの体温がする。こんなところをリーゼに見られたらどうしよう。

「わらわは皆の者に助けられてばかりじゃ。その恩を忘れることがあつてはならんと、今、心に刻んでおるところじゃ」

「うん。それでいいと思うよ」

おれは軽くロザミアを抱きしめた。

夜は、静かにすぎた。

気づくと、リーゼは、しっかりとこの場面を見ていた。

「この城は領主さまが逃げ出してしまって、人っ子一人おりません」とある城下町に着くと、町の人がそういつていた。

「どうする？ ロザミア？」

おれが聞くと、

「とりあえず、城の様子を見てこよう。異常がなければ、領主を町の中から任命して、占領しよう」といった。

それで、おれたちは無人の城の中に入っていった。

「まあ、おそらく、当然のように怪物が出るのだろうな」
アイザがいつている。

「ああ、スニーク帝国領内だからな。わらわもそう思う」
ロザミアが答える。

結果として、怪物は出なかったものの、城の中の石像が動いて襲ってきた。何十体の巨大な石像が彫ってあったのだ。

「この動く石像、剣が刺さらんぞ」
ロザミアがわめいた。

おれは例によって、楽勝だから、動く石像を一体、二体と一撃で倒していったが、少し、様子を見ることにした。

あることが気になったのだ。

リーゼのそばに行き、リーゼを守りながら、残り三人の動く石像との戦いを見ていた。

「えいつ、とおっ」

アイザのかけ声が響く。

ごつんつと重い動く石像の殴りがアイザに効く。

「ロザミア様、大丈夫ですか」

アイザが叫ぶが、ロザミアは答える余裕もない。

「アイザ、厳しい」

ロザミアがひとこと、やっとのことで話す。

そんな中、生きのいい動きをする者が一人だけいた。

神さまだ。

神さまは動く石像の攻撃を全部かわし、剣をずさつ、ずさつと斬りこんでいく。

おれはこつちに向かってくる動く石像を倒しながら、アイザとロザミアと神さまを見ていた。

動く石像の攻撃を全部かわす神さま。攻撃を受けてしまうアイザ。とても相手にもならず、後ろに下がるロザミア。

アイザの剣が斬っても、動く石像は倒れない。

神さまの剣は、何度か当たると、動く石像が倒れていく。

あの三人の中で、動く石像を倒せるのは、神さまだけだ。

おれは近づいてきた動く石像を一体、斬り倒していった。

「リーゼ、神さまはアイザより強くなつたね」

「え？ そうなのですか、救世主さま？」

リーゼも聞いて驚いていた。

「ああ、アイザは防御でも攻撃でも、神さまより押されている。神さまの剣の腕は、アイザを超えた」

「はい。確かに、見ていると、そう思えてきます。めかけはいわれらるまで、気づきませんでした」

「リーゼも、神さまを軽く見ているね」

リーゼが驚いて、汗を流していた。

「いえ、救世主さま。めかけにそのようなところがあったら、めかけは破滅です。もう、めかけは心がくじけてしまうそうです。めかけは神さまをあまく見すぎていたのでしょうか」

リーゼが苦しそうに話す。

「おれも、神さまがあそこまで成長するとは思わなかったよ。やっぱり、神さまは力がなくても神さまなんだなあ」

神さまとアイザとロザミアが苦戦しながら、ぎりぎりで戦っている。

「見る。動く石像を倒せるのは神さまだけだ。アイザもロザミアも、
一体も倒していない」

「はい。めかけが見ていてもそうです」

動く石像の殴りをくらって、神さまがふっ飛んだ。

「大丈夫か、神さま」

アイザが叫んだが、おれが助けに行くことにした。

「ここは任せろ、アイザ」

おれが一体、二体と動く石像を倒していく。

アイザも動く石像と斬り結んでいる。

神さまは不屈の根性で起き上がった。

「我輩、まだ、この程度では負けないでござる」

神さまがやってきて、動く石像を斬り倒していった。

結局、三十体ぐらいいた動く石像を倒した。二十体以上はおれが
倒したものであり、残りは神さまが倒したものであった。

「はあ、はあ、今回は苦戦したなあ、まこと」

アイザがいった。

「ああ、お疲れ、アイザ。よくがんばったよ」

おれは答えた。

次の日、朝の剣術の訓練の時、神さまはアイザにいった。

「アイザ殿、剣術の修行は今日で終わりにするでござる」

それを聞いてアイザは怒った。

「なんだ！ 根を上げたか、神さま。この軟弱もの。このアイザに
勝てるようになるまで、修行を怠るんじゃない」

「すまぬが、もう、アイザ殿の訓練は終わりにするでござる」

「なにい。貴様、そんなことでロザミア様の直属軍が務まるとでも
思っているのか！」

アイザは怒鳴った。

しかし、次のひとことでおれは神さまの気持ちがあわかった。

「まこと殿。今日から、まこと殿が我輩の剣の指導をしてくれない
か」

神さまはいった。

なるほど。神さまも気づいているんだな。自分がアイザより強くなったことに。

「いいよ、神さま。おれが剣術の訓練の相手をするよ」

「ありがたいでござる、まことどの」

「でも、おれ、剣術の腕なんて、てんで素人だよ」

「かまわないでござる。思うとおりのことを教えてくだされ」
神さまは謙虚だった。

「はい、ほい、あそれ、ほれ、ほれ」

おれは、神さまの剣を軽く受けるだけの練習を始めた。

「まことも神さまもなっておらん。精神がたるんでいるぞ。わたしの修行についてこられずに、本当に強くなれるなどと思うな」

アイザが怒鳴っている。

「まこと」

ロザミアが何がいたそうだったが、

「神さまの好きにさせてあげてよ。お願い、ロザミア」
おれがいうと、

「うん」

と、ロザミアが答えた。

ロザミアは気づいているだろうか。神さまの剣の腕がアイザを超えたことに。

少なくとも、アイザは気づいていないようだった。

「二人とも、剣の振りがあまいわ」

アイザは怒鳴っていた。

「何か、怪物がいますね」

リーゼがいった。

「うむ。だが、眠っているようだぞ」

アイザが答えた。

おれが見ると、一メートルくらいあるキノコみたいな怪物に足がついていた。それが二匹いる。

「あれは、眠りこぼし夢こぼしじゃ」

ロザミアが説明した。

「眠りこぼし夢こぼしというത്？」

おれが質問すると、

「通りすぎる者を眠らせて、夢の中に迷いこませる怪物じゃ。気を付けておれ。眠っておるが、眠ったまま攻撃してくるぞ」

とロザミアが答えた。

「わたしが退治しましょう」

アイザがすすんで前に出た。眠る怪物二匹相手に一人だ。

「ふふふ、このアイザ相手に眠ったままで戦うとは、ぐふふふ、すぴー、すぴー」

アイザは眠ってしまった。

「見よ、気をつけると申したではないか」

「めかけは怖いです」

「ならば、我輩の出番じゃな」

つついて、神さまが眠りこぼし夢こぼしを倒しにいった。

「我輩に敗北の二文字はない」

と、いって剣を振り上げると、

「ぐおーすか、ぴーぴー」

と、熟睡してしまった。

アイザと神さまが地面に倒れ伏して眠っている。

「これはかなり危険な相手だな」

「うむ。まこと、しかたないが頼む」

「わかった」

そして、おれが眠りこぼし夢こぼしに斬りかかった。

気がつくとき、おれは、神さまと剣を交えて戦っていた。

やばい。何か、罠にはまった気がする。

「救世主さまも眠ってしまったのです。まさか、この怪物が高位の魔道士？」

リーゼが悩んでいた。

「三人も眠らされたのでは、危険すぎる。このままでは、五人とも眠らされて、全滅するかもしれん。わらわとリーゼは待機じゃ。三人が起きるまで待つとしよう」

ロザミアが慎重な作戦を立てた。

おれはその隣で、神さまと戦っていた。

「我輩に勝とうなど、笑止千万」

「待て、神さま。これは罠だ。おれたちは催眠にさらされているんだ」

「そんな戯言で我輩が手を収めると思ってたか」

いつになく、神さまの動きが速い。

がきんっ、がきんっ、神さまの剣を受けるので精一杯だ。このままでは、殺される。

神さまはいつの間にかおれより強くなっていたのか。

しかたない。

ばしっ。

おれの剣の一撃が神さまに当たる。神さまは斬り殺されて、死んだ。

神さまは後で生き返らせよう。それより、残りの三人は？

気づくと、アイザが裸で剣をかまえていた。

「まこと、悪いが死んでもらうぞ。今までの恨み、晴らさせてもらう」

「なんだ、恨みって？」

「わたしからロザミア様をとりあげた罰だ！」

ぼよんとアイザのおっぱいが揺れる。剣がゆっくりと迫ってくる。軽くかわして、剣の柄で、アイザを叩く。アイザは気絶した。

「よくもアイザを。まことはわらわを裏切るつもりか」

ロザミアがなぜか裸で剣をかまえていた。

「待て、ロザミア。これは、怪物の催眠術だ。すぐに術を解く。待ってる」

おれが制するが、ロザミアはいうことを聞かない。

「術を解くよりも先に、このチャンスにわらわを犯すのが汝の役目であろう。さあ、早く、わらわをむちゃくちゃにしてくれ」

何をいってるんだ、ロザミアは。

「早く、早く、わらわはもうダメじゃ」

裸のロザミアが悶えて、地面でよがっている。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

ロザミアのあえぎ声がある。

おれは何もしてないぞ。おれにはリーゼがいる。

そう思うと、裸のリーゼが現れた。

「めかけと一緒にしましょう、救世主さま」

「何をいってるんだ、リーゼ」

「もう、帝国がどうなろうと、世界がどうなろうと、かまわないではないですか。眠りこぼし夢こぼしは、リーゼよりも強い魔力をもつ高位の魔道士だったのです。この怪物の力で、救世主さまは元の世界に帰れます。いや、帰されます。だから、最後にめかけと」

リーゼがおれの首に腕をかけてきた。

なんだと。突然だが、帰る時が来たのか。それならば、リーゼとロザミアと記念をつくっておこうか。

リーゼのおっぱいを右手でもんだおれに、リーゼが語りかけてきた。

「ここは夢の中です。もう、救世主さまはこの夢から出られません」

はっ、すっかりしろ。

肝心の、眠りこぼし夢こぼしはどうなったんだ？
いた。

眠りこぼし夢こぼしは、おれの夢の中で眠っていた。

「ここは救世主さまの夢の中です。何をしても、あの怪物を倒すことはできません。例え、夢の中であの怪物を倒したところで、救世主さまは夢の中なのです」

「やってみなければわからないだろう」

おれはリーゼから離れると、剣を振りかざし、眠りこぼし夢こぼしを斬り殺した。

まず、一体。

「ぎゃおおお」

と声がして、眠りこぼしは死んだ。

ぐさっ、と夢こぼしから触手がのびて、おれの腹を刺した。夢こぼしの攻撃はおれを貫いていた。

おれは死ぬのか。

いや、気をしっかりもて。こんな道端の怪物二匹に殺されてたまるか。

おれは腹を刺されたまま、夢こぼしに近づいた。

ずさつと、夢こぼしを斬り殺す。腹の傷は痛くはなかった。

気がつくと、服を着たリーゼとロザミアがこちらを見ていた。

「わあ、すごいです。めかけもびっくりです」

「今の、まことがやったのか」

何が起きたんだ？ 何が何だかわからない。

「説明してくれ。何が起きたのかを。おれは催眠に会っていた」

見ると、服を着たアイザと神さまが気がついて起き上がるところだった。

眠りこぼし夢こぼしは斬り殺されて死んでいる。

「めかけが見ていたままと説明します」

「うん、頼む」

「救世主さまは眠らされたのです」

「何！ おれが眠っていた？」

「そうです。救世主さまは確かに眠らされました。ですが、魔術で見えていましたが、眠った救世主さまは夢の中で、夢の中の眠りこぼし夢こぼしを斬り殺しました」

「そんなの無意味だろう」

「それがそうではなかったのです。夢の中で殺された眠りこぼし夢こぼしは、現実世界でも、同時になぜか斬り殺されて死んでしまいました」

「はあ？」

おれには少しよくわからなかった。

「どういうことだ」

「救世主さまの夢の中で攻撃されたものは、夢の中であっても、現実

に攻撃を受けるようです」

そう、なのか。
「何にせよ、今回は危なかったな。負けるかもしれないと一瞬思った」

「はい、めかけも驚きました。あの怪物は、めかけと救世主さまが探していた高位の魔道士のひとつです」

「何だつて！」

おれは驚いた。

「だけど、殺しちゃったぞ」

「はい、それが救世主さまの意志であられましたので」

「簡単に殺しちゃ、まずかったかな」

「むしろ、救世主さまが無事に夢の中から帰ってきてよかったです」
「おれを眠らせるなんて、相当にすごい魔力なんだろ」

「そうです。想像を絶する強い魔力です」

「おいしい敵を殺したな」

「でも、眠りこぼし夢こぼしはずっと眠っているので、交渉できなかったのです」

「しかたないか」

「まあ、あきらめましょう」

おれは初めて出会った高位の魔道士にしばらく心が休まらなかった。

高位の魔道士が味方になるとは限らない。

むしろ、敵として、おれとリーゼを利用しようとする可能性の方が高いはずだ。

おれたちは、優しい高位の魔道士を探さなければならぬのだ。眠りこぼし夢こぼしのような、外敵を倒そうとする高位の魔道士ではなく。

26 (後書き)

感想が欲しいです。まだ途中ですが、誰か感想くれると嬉しいです。

帝都が近づいてきた。帝都を守る前線要塞を例によって五人で襲撃することになった。

「気を抜くな。きつと、スニーク帝国も厳重な警戒をしているはず」
ロザミアが注意した。

まあ、おれがいて負けることはないだろうけど。
夜をしのいで、要塞の裏口を木槌で叩き壊した。

「何をするんだ、おまえたち。こんなことをしてただではすまんぞ」
「すまない。わらわの手元が狂ったのじゃ」

ロザミアが強引ないいわけをしている間に、目撃者のスニーク兵七人を、おれとアイザで斬り倒そうとした。そうしたら、珍しく、神さまが敏捷な動きをして、二人斬り倒した。

おれが四人斬り倒し、アイザが一人、神さまが二人斬り倒した。
「おお、神さまやるなあ。アイザより多いじゃん、やっつけた数」
「えへん。我輩はすごいのでござる」

「くそつ、完全に油断していた。神さまなんか遅れをとるとは」
アイザが悔しがる。

この神さまは褒めると素直に喜ぶ。そういうものなのだろうか。
わかりやすい。扱いやすいともいえる。

「よし、例によって、魔族に気をつけるのじゃぞ」
ロザミアが念を押す。おれも、魔族の恐ろしさは怖いほどわかっている。

「よし、まずは要塞の門を開けるぞ。全員、ついて来い。その後に、司令室を奇襲せよ。バラバラになっては危険だ」

「はい、ロザミア様」

「はいはい、了解だよ、ロザミア」

おれとアイザが命令を承諾しながら、さっそく部屋から飛び出した。

スニーク兵がぎつしりと詰めている。この要塞を落とさなければ、帝都に進軍できない。

一人、二人とスニーク兵を斬り倒していく。

「リーゼ、ついてきているか」

「はい、救世主さま」

リーゼを守りながら、次々と敵兵を倒し、正面通りを真っ直ぐに進む。

スニーク兵は相変わらず弱い。訓練してないんじゃないだろうか、この兵。アイザはもちろん、ロザミアより弱いし。

そう思っていると、神さまが剣を振り回すように旋回ながら敵兵を斬った。

「大世界旋風」

神さまはそうこの技に名前をつけたらしかった。神さまに、次々と敵兵が殺されていく。

アイザは愕然としていた。

もはや、おれと神さまの二人を止められる敵兵は一人もいない。剣を振り回すたびに、敵兵が死んでいく。世界が変わっている。

「神さま、今日はぜひぶん腕がたつなあ。わらわは驚いたぞ」

ロザミアが感嘆している。

「門についたぞ、ロザミア」

おれがいうと、

「よし、開門しろ」

ロザミアが命じた。

神さまが敵兵相手に無双している間に、おれとアイザで、門を開ける滑車をぐるぐる回した。

「バカな。たった五人に、この帝国最強の要塞を落とされるなんて強すぎる」

スニーク兵が驚いている。

「この辺で、切り出したらどうだい？」

おれがロザミアに促すと、意味は通じたようだった。

「わらわはロザミア・バツシュ。バツシュ帝国の後継者じゃ。この要塞はこれから、バツシュ帝国の傘下に入る。降伏するものは武器を捨てよ。逆らうものは容赦なく叩き斬るぞ」

何人かは武器を捨てたが、いきりたつて、襲ってくる敵兵もいた。そいつらを神さまが一人で一掃する。

「神さま大活躍ですね」

リーゼが嬉しそうにいう。

「ああ、もうすぐ帝都だからな。帝都には魔王が待っている。神さまの命もそれまでだからな。最後の灯火だろ」

おれは答えた。

門を征圧したら、次は司令室に向かった。降伏したスニーク兵に道順を聞いて、司令室を目指した。

司令室で待っていたのは、ベビーサタンだった。

「なんだ、おまえたち。ぼくちんの要塞で勝手に遊ぶな」

ベビーサタンは、大爆発の魔法を唱えようとした。

だが、何も起きない。

「こいつ、魔界の王の子ども？」

「どうやら、そうらしいの」

「わたしに任せろ、まこと」

アイザが飛び出た。ベビーサタンの巨大フォークと互角に斬り合っている。

「うーん、どうする、リーゼ」

「めかけが思うに、内緒ですが、アイザでは危険だと思います」

「かといって、神さまに任せるのはまだ早いしなあ」

しかたなく、おれがアイザの加勢に加わった。

「隙あり」

おれがベビーサタンを一撃で後ろから斬り殺した。

「ぎゃあ、助けてよ、パパ」

ベビーサタンはそう叫んだ。

「よくやった、まこと。正直、疲れていた」

「うん、アイザ。ご苦労さま。それより、こいつのパパって？」
サタンパピーが現れた。

「ベビーサタンに、サタンパピー、こいつら、魔界で身分詐称罪にならないのかな」

「その可能性はありますが、魔界は混沌としていますからね」

「え？ 魔界に行ったことあるの、リーゼ？」

「めかけは少しだけ」

「すごい」

おれとリーゼがのんびりと会話をしていると、サタンパピーに神さまが燃やされていた。

「あちちち」

神さまが痛がる。

神さまでは、まだ魔族の相手は無理か。

「どいて、神さま、おれがやる」

「我輩、悔しいでござる」

おれと神さまが変わると、

「うっきー、まがいなりにも魔界の王の名を名のるあちきに勝てると思ってるのか。その傲慢、許しきれん、うっきー」

おれは一撃でサタンパピーを斬り殺した。

すると、椅子の後ろに隠れていたスニーク兵が騒ぎ出した。

「まさか、サタンパピー様がやられるとは。これがバツシユ帝国の力か」

「そうだ、サタンパピー様が負けるわけがない。勝てるとしたら、神の意思はバツシユ帝国にあるのかも」

そんな会話を聞いて、おれたちは爆笑した。

「なんだ、スニーク帝国は神の御意思に従うのか。あははははは」

「そうだ、神さまなら、おれたちの中にいるぞ」

おれも笑った。

「我輩の意思は、地上の支配者は地上に任せることにある。我輩は遊んでおるにすぎん。それ、スニーク帝国の司令官、出てきて、我

輩と勝負しろ」

「はっ、わたしが司令官です」

スニーク帝国の兵が一人、起立した。

「わたしの相手をするあなた様の名前は何でしょう」

「あはははははっ」

おれたちは笑った。

「何がおかしい、バツシユ帝国！」

司令官が笑うおれたちに怒ったが、おれがツツコンだ。

「あなたの相手の名前は、神さまですよ」

「何い、か、み、さ、ま？」

一瞬、スニーク帝国の司令官は、本当にバツシユ帝国に神さまの加護があるのかと思ひ浮かべたのだった。

だが、実際には、神さまは遊んでいるのだそうだ。これが、神さまの世界観。

「我輩が一对一で相手してくれる」

「は、よろしくお願いします」

スニーク帝国最重要要塞司令官は、神さまと一对一で剣をかまえた。

斬り結ぶ二人。実力差は明白だった。

神さまの勝ちだ。

「おおお、やるなあ、神さま」

「すごいぞ、神さま」

ロザミアも歓声をあげている。

「どうであったかな、ロザミア殿、我輩の立会いは」

「うむ。わらわは神さまを見直しておる」

ロザミアは神さまを褒め称えた。

面白くないのは、アイザだ。むすつとしている。

「これより、この要塞はバツシユ帝国の支配下になった。それ、祝杯をあげるぞ」

「いやっほっ」

おれたち五人は勝利の喜びにひたっていた。

その日のお風呂は盛り上がった。

おれは、リーゼとロザミアとアイザの三人と一緒に風呂に入っている。三人の体を洗うのはおれの役目だ。

「いよいよ、帝都目前まで来たのう」

「そうですね。いよいよ、最終決戦ですね」

「めかけが思うに、救世主さまが素敵すぎます」

リーゼに褒められた。うれしい。

「まさか、わらわもまことがサタンパイプを一撃で倒すとは思わなかったぞ。あれには、感嘆した」

「いやあ、たいしたことないよ」

おれが謙虚に答えると、ロザミアがむっとした。

「まことはわかっておらん」

なんだ？

「帝都を攻略したら、わらわは戴冠せねばならん。その時、当然、結婚の儀をとり行うであろう」

「け、結婚だつて？」

おれは驚いた。まさか、ロザミアは誘っているのだろうか。

「ちよつと、ロザミア様、めかけに異議ありです。救世主さまは帝国をとり戻した後でも、めかけと旅をしなければならぬ身です。

めかけに黙って、救世主さまをとりあげようなどは考えておりませんか？」

「おや、ちよつとロザミアに強気でいいすぎではないだろうか、リーゼ。」

だが、リーゼと旅をつづけることになるだろうなあ。高位の魔道士を探さなければならぬし。

まあ、おれはリーゼがいれば、申し分ないが、三人一緒に相手するというのがもたまらない。

「リーゼこそ、わかっておらん。わらわと結婚するということは、これまでのような風呂手伝いの付き人ではなく、交尾をする相手になるということじゃ。わらわには想像もつかんのじゃが、交尾とはどのようなものであろうなあ」

「ごくり。おれは唾を飲みこんだ。

「ここは、的確な判断が要求されている。ロザミアと結婚しては、リーゼとアイザが離れてしまつかもしれない。二人を失うのは惜しい。もったいなすぎる。

できれば、四人で交尾したい。

「というか、ロザミアは性交のことを交尾というのか。

「ロザミア様に女色の気はありますかと」

おれはわけのわからないことを言い出した。

「なんじゃ？ わらわが女色とはどういうことじゃ、まこと」

「はい、ですから、ロザミア様は男の方とも、女の方とも、交尾なされる方かと思っております」

「ななななな」

ロザミアがあきらかに混乱している。

リーゼとアイザは様子をつかっているようだ。

「どういうことじゃ、まこと。わらわが嫌で、わらわに女でも押し付けて求婚を断ろうということか？」

「ロザミア様！ ロザミア様は、まことに求婚なさっておりますのでしたので？」

アイザが驚いた。

リーゼは様子を見ている。

リーゼとロザミアを結びつける勝利の方程式。それがロザミアの女色癖。

「うおほん、アイザ、万が一の話じゃ」

ロザミアが否定した。照れている。

おれは話をつづける。

「おれが思うに、ロザミア様は、リーゼとアイザを愛しておいでで

す

「えええ？ 何をいいたすんだ、まこと。わたしがロザミア様に愛されているなどと」

アイザが動揺している。

こいつは、マジだから、始末に困る。

リーゼは様子を見ている。

「そこで、婚礼の儀ですが、ロザミア様は、おれとリーゼとアイザの三人と重婚なされてはいかがでしょう」

「はっ！」

ロザミアが天啓に打たれたように衝撃を受けている。

おれが誘っているのに、気づいたのだろうか。

おれが何を誘っているのかに気づいたのだろうか。

「あはははははっ、考えてもみなかったわ。わらわが女娼を囲うというのか」

ロザミアの後宮を女で埋めつくすこと。これこそ、勝利への方程式。

「あはははははっ、よい、面白い案じゃ。なあ、アイザ」

突然、話を振られて、アイザは声が高くなった。

「わ、わたしはそれでもいいと思います」

この女は本当にロザミア目当てだから困る。

「めかけは、救世主さまが男娼として、囲われるなら、めかけも女娼として、囲われてもかまわないと思います」

「何をいつておる。立場上、男娼ではまずかるう。表向きは、夫とということにしなければ」

「ぶっつ」

リーゼの頬が膨れた。

かわいい。

が、ここはリーゼに折れてもらわなければ。

「リーゼ、リーゼはおれがこの世界から帰れない責任をとって、ロザミアの女娼をやるべきだと思うが。それがリーゼの責任だろう」

「はい。めかけは救世主さまのめかけでございますから
いった。確かに、おれのめかけだっていった。
よしっ。

ロザミア後宮、女漬け計画始動。

そこで、何が行われるか、ロザミアとリーゼは気づいている。知
らぬはアイザばかりよ。ふふふっ、あの愚か者が。

「何々？ ロンドバル將軍、破竹の進軍。バッシユ帝国再興なるか、だつて？」

おれが町の店屋で新聞を買った。

「ロンドバルとは何者だ」

ロザミアが首をかしげる？

「ほら、西の州都を征圧した時、軍を率いて、帝都に攻め入るように命令した將軍がいたじゃん。あの人、おれたちが通った後を通して、負けなしの連戦連勝らしい」

「ふむ。ちよつとその新聞、見せてみよ」

「ほれ、ロザミア」

「何々、ロザミア姫生存か？ 謎の潜伏活動の噂じゃと。わらわを愚弄しておるのか、この新聞は」

「まあまあ、怒らない、怒らない、ロザミア」

「うむ。しかしのう、ロンドバル將軍は、二十五日に帝都に攻め入るといつておるが、二十日にはわらわたちは帝都に攻めこむのではないか？ いつもわらわたちの後ろを追いかけてくる男よのう」

まあ、それは、厳密な意味で正しい戦略といえる。どう考えても、おれが攻めた後を通った方が効率が良い。

「それじゃあ、今日、一泊したら、いよいよ、明日、攻め込みますか」

「うむ、一同、わらわのためにこれまで尽力してくれて、誠に感謝しておる。じゃが、最後の最後で決して油断してはならん。万全を期して、明日に望んでくれ」

「はい、ロザミア様」

そして、おれたちはその日、帝都の城下町の宿屋で熟睡した。

その日は、朝早くに目が覚めた。

ロザミアがもう起きており、朝日が昇るのを見ていた。おれも、

ロザミアの隣に立ち、一緒に朝日を眺めた。
平穏な帝都の朝だった。

いつの間にか、リーゼが来て、おれの後ろから見ているのがわかる。

「ロザミア、長かったけれど、いよいよ、皇帝になる日だね」

ロザミアが顔をおれの首筋に持たれかけてきた。

「すべて、まことのおかげじゃ。わらわが気づいておらんわけがなかるう」

「ロザミア」

おれはリーゼを振り返った。

「よう、リーゼも起きたのか？」

「なんじゃ、バカ娘。わらわに気を利かせて、引っこんでおれ」

ロザミアが命令すると、リーゼが怒った。

「なんだと、この姫さま。救世主さまは仕方なくあなたの夫にならなければならなくなったというのに、その気持ちもわからないで、バカバカバカバカバカ！」

リーゼがロザミアをぼかぼか叩いている。

ロザミアも抵抗しなかった。おれとリーゼの気持ちに気づいているのだらう。

「もうやめておけよ、リーゼ」

「救世主さま」

リーゼはおれに手をつかまれると、びくつとしたようだった。

そして、うわあん、うわあん、と泣き出してしまった。

おれは仕方なく、リーゼを抱きしめた。

「リーゼ。ロザミアと結婚しても、おれの心はきみのものだよ。安心しなよ」

リーゼの耳元にささやいた。

そんなことで騙されるリーゼではないのだが、文句はいわなかった。

「めかけは救世主さまのものです」

リーゼはそういう。

その日、おれたち五人は、スニーク帝国皇帝の待つ帝都の城へ攻め込んだ。

29 (後書き)

さあ、いよいよ、次回から最終決戦です。

帝都の城、門番は二体の鉄巨人だった。

アイザに向かって振り下ろされる鉄巨人の巨大な剣を、おれが叩き斬った。

「神さま、右のやつを頼む」

「わかったでござる」

おれが左の鉄巨人を一撃で倒した後、振り向くと、神さまは鉄巨人と何合も斬りあっていた。

「神さま、任せろ」

おれが右の鉄巨人も一撃で倒す。

もはや、アイザとロザミアは戦力にならない。

「敵兵だ。見ろ、ロザミア姫が殴りこんできたぞ」

敵兵が叫びだした。

やれやれ、雑兵など、相手にしている場合ではない。

「大世界旋風」

神さまが剣を旋回させて、雑兵を無双していく。アイザ、ロザミアもがんばって戦っている。

「おやおや、ロザミア姫の軍が勢いづいていると聞いたが、こんな凄腕がついていたか」

スニーク兵の中から、どっしりとした鎧に身をつつんだ男が堂々と真ん中を歩いてやってきた。

「誰だ、あれは？」

「あれは、名將シュナイク將軍だ」

アイザの声がかすれた。

「悪いが、ここは通すわけにはいかん」

シュナイク將軍が剣を抜きながら、大きく両手を広げた。

「ここは、わたしに任せて、ロザミア様たちは早く先へ」

アイザが名のり出た。

「わかった。アイザ、任せたぞ」

ロザミアは走り出す。シュナイク将軍のロザミアに振り下ろした剣をアイザが受け止めた。

「あなたの相手はわたした」

アイザがいう。

これは、おれが見るに、アイザの分が悪い。

「ロザミア、先に行ってる。おれはアイザを見届けてから行く。おれが着くまで、無理はするな。手強い敵は神さまに任せろ」

「わかった、まこと」

ロザミアは城の奥へ走っていった。リーゼと神さまもついていく。そういえば、この帝都のどこかに、魔王もいるんだっけ。何かあったら、生き返らせればいいけど、失敗する可能性があるから、あまりみんなに死んでもらいたくはないなあ。

「まこと、ここはわたしに任せて、おまえも行け」

「いや、そういうわけにはいかない」

「何者だ、貴様」

シュナイク将軍から声がかかった。

「立会人だよ」

おれは答えた。

アイザ対シュナイク将軍。

「ならば、相手をしよう、小娘」

シュナイク将軍が大きく剣を振った。

アイザが力に負けて、押しつぶされそうに剣を受ける。

この旅で、アイザも剣の腕をあげてきた。ロザミア女帝の近衛兵長として、その剣の腕は建前上、皇帝一でなければならぬ。

すなわち、アイザはシュナイク将軍に勝てなければならない。

「えいつ、やあつ、とおつ」

アイザがフェイントをまじえて、シュナイク将軍に斬りこむ。シュナイク将軍はフェイントに引っかけたようだ。だが、ぎりぎりで受けられる。

おれは二人の試合の邪魔になる敵兵を全部、倒しながら、じつくりと二人の戦いを見ていた。

「ただの女剣士ではないようだな」

「その通りだ。わたしはロザミア姫の懐刀、アイザだ」

「だが、その腕ではまだ、このシュナイクには適わんな」

「知れたこと。あなたのような名将と戦う機会が来ようとは思っていなかった」

「わたしを倒せなければ、ロザミア姫の戴冠はないぞ」

「なぜ、スニークについたシュナイク將軍。返答しだいでは許さない」

シュナイク將軍が顔をしかめた。

「魔族の女に惚れた。のだ」

アイザの剣が一瞬、止まった。そして、ちらつと、おれを見た気がした。

「剣士が色恋沙汰で道を違えるなど、愚かだとは思わないのか」

「本当に。心の底から、魔族の女に惚れたのだ。あれはいい女だ。我が剣を捧げるに足る」

「なるほど。面白い」

アイザが剣を振りながら、語る。

「この旅で、わたしも恋をしたぞ、シュナイク將軍」

「わははははっ、そうか、もう小娘ではなかったか」

「ふっ、その男はあなたより強い」

「見てみたいな、その男とやらを」

「あなたより数段強い」

アイザが身を捨てて、相打ち狙いで剣を突いた。

シュナイク將軍は、おそらく、わざと、剣を止めた。おれにはそう見えた。心が、アイザを認めたのだ。

すさっ、とアイザの剣がシュナイク將軍の胸に刺さる。

「ぐほっ、見事だ、女剣士よ」

シュナイク將軍は倒れた。

「敵将シュナイク將軍を討ち取つたり」

アイザが叫んだ。

「うわあああ、とスニーク兵が逃げ始めた。

「わたしの恋した女魔族は、わたしに何か嘘をついているのだ」

「遺言を聞くぞ、シュナイク將軍」

「偽りの愛でも、愛していたと、我が妻へ」

「うむ」

アイザはシュナイク將軍から剣を抜いた。シュナイク將軍は倒れ伏した。

リーゼが戻ってきていった。

「ロザミア様は謁見の間へ突撃しました。神さまは地下の祭壇です。謁見の間には、スニーク皇帝が、地下の祭壇には魔王がいます」

「アイザはロザミアのところへ行ってくれ。おれは神さまを追う」

おれが叫ぶと、アイザとリーゼは走り出した。

さあ、いよいよ、魔王退治だ。

おれが地下の祭壇へ行くと、ちょうど、神さまが魔王と睨みあっているところだった。

「まことが来たか」

神さまが珍しく、おれの名を呼んだ。

「神さま、無理だと思ったらいつでも声をかけてくれ。おれなら一撃で魔王を倒せると思うから」

おれは神さまに声をかけた。

それを魔王が激怒した。

「雑魚は黙っておれ。これは世界の支配をかけた余と神との戦いじや」

おれは魔王の手下たちを軽く一掃しながら、神さまと魔王の戦いを見ていた。

神さまがいった。

「魔王、我輩は貴様のことを嫌いではない。こうなったのはひとつの縁だ。だが、生きるのも死ぬのも遊びにすぎん。儂く死ぬものを我輩は不幸だと思わない」

神さまが剣をかまえた。

魔王が戦闘態勢に入る。辺りの瘴気がいっそう濃くなり、常人なら、息をするだけで死にそうだ。

「この魔王が儂く死ぬというのか、神よ」

「そうじゃ」

神さまは素早く動き、魔王の火炎魔法をかわした。

勝てるわけがなかった。神さまが勝てるわけがなかった。

神さまが剣で斬りかかると、魔王は素手で剣をつかみとった。その巨大な手は、剣の刃に傷つけられることを恐れていない。魔王は、悲願であった神との戦いに望んでいるつもりなのだ。

本当に神の力をもっているのはおれなのだけれど、魔王は神さま

を神と見抜く能力があり、なまじ、高い観察力があるがために、本
当に神の力をもつおれを見逃している。

魔王が今、戦っているのは、異世界からやってきた凡人の高校生
の体、すなわち、おれの体をした、何のとりえもないはずの非力な
若者だった。

「この魔王、五千年生きてたが、これほど、嬉しい時はないぞ、神よ。
貴様と戦うのが我が夢であった」

魔王がうなる。

「神さま何歳だっけ」

おれが聞くと、

「我輩は百三十億歳だったかのう」

と答えた。魔王の顔に戦慄が走った。

五千年と百三十億年では、桁がちがいすぎる。話にならない鍛錬
の差だ。

「だが、この体ではまだ一歳にもなっていないかな」

「なんだよ、神さま、ゼロ歳かよ」

おれが魔王の手下を一掃しながら、笑いながら話していると、魔
王が吠えた。

「この魔王、生まれてこの方、臆病者といわれたことだけはないわ」
魔王は百三十億年を恐れなかった。その勇気は褒め称えられるも
のである。

もともと、神さまに勝ち目はないのだ。

神さまは魔王の極寒の腕で殴られて、体が凍りつくように冷やさ
れながら、壁に叩きつけられた。

いつ、神さまと変わろうか。

「神さま、まだ、がんばれる？」

おれが聞くと、

「我輩が逃げる理由はどこにもない」
と神さまは答えた。

まだ、がんばる気だ、神さま。魔王相手に立っているだけでも精

一杯のはずだ。

神さまが、魔王に剣を斬りつける。魔王がそれをかわす。そして、また、神さまは殴られて、壁に叩きつけられた。

少しづつ、少しづつ、神さまは魔王に傷を付けていく。

神さまの剣術の修行は、今日の朝までずっと続いていた。今では、おれが相手をしている。おれには、訓練をしても、神さまが強くなったようにはまるで思えないんだけど、神さまは、

「思うほど、剣術の極意がわかる」といつていた。

まあ、神の力をもつおれ相手に戦っているのだから、その剣のやりとりは、世界創造の深淵につながる奥義を極めたものである。

その神さまが、魔王に少しづつ傷を付けていく。だんだん、神さまは魔王の攻撃を見切っていく。

魔王の攻撃が当たらなくなり、神さまの攻撃が魔王をとらえるようになる。

おれはお伽話を見ているのかと思った。

神としての力を奪われた神さまは、ただの凡人な人間の体になりながらも、努力し、作戦を練り、あきらめることなく訓練し、みずからの作った世界に住む人類の誰にも不可能であった魔王退治を、みずからの努力で、なしとげてみせるのだろうか。

「くそう、神よ、くらえ、我が最大の奥義、根源粒子破壊！」

神さまは血を口から吐き出した。理屈のわからない原理で、魔王の攻撃は神さまに効いている。

「神さま、そろそろ、変わるうか」

「その必要はない」

神さまは一人で魔王に立ち向かった。

神さまの攻撃は、魔王に百回は当たった。魔王はまだ倒れない。神さまも倒れない。いつたい、どのように人体を制御しているのだろう。もう、とっくに限界のはずだ。

「まことよ、何か我輩に教えることはあるか」

神さまが魔王を見ながら、聞いてきた。

「そうだな。神さまが勝つには、おれと交替するしか手はないということかな」

おれが正直に答えると、神さまはいった。

「まことよ、我輩のつくった世界ではな、努力して不可能なことはひとつもないのじゃ」

神さまの攻撃が千回、魔王に当たった。

魔王の足がぐくつと崩れた。
バカな。

勝てるわけがないではないか。神さまは、元の世界のおれの体を
しているんだぞ。

「この魔王、必ず、神を殺す。魔王の名にかけて、神には負けん。
邪神封印」

「効かぬな、魔王。そんなものが、お主の最後の手とはな」

神さまは、魔王に剣を刺した。それは、透き通るようにきれいに
魔王の体に刺さった。

神さまの剣術は、剣聖の域に達している。

そして、神さまは魔王にとどめを刺した。

「ぐおおおお、なぜだ、なぜ勝てぬのだ。卑怯だぞ、神よ。もともと、魔王の我に勝ち目のないように世界をつくっておいて、そのま
ま、この魔王に勝つというのか。造物主が被造物で遊ぶというのか」
「だから、我輩の命もお主の命も遊びだといっておろう。儂く死ぬ、
魔王よ」

魔王は地下の祭壇に倒れ伏した。

「魔王、遺言を聞いてやるぞ」

おれが聞くと、

「この魔王には、神への恨みしかないわ」
と答えた。

すると、神さまが答えた。

「だからな、我輩のつくった世界に努力して不可能なことは何ひと

つないのじゃ。例え、神殺しでもな。お主の努力が足りなかったの
じゃよ」

そして、神さまは魔王に勝った。魔王は死んで動かなかった。

「すげえ、神さま」

おれは目を丸くして驚いていた。

31 (後書き)

この回を書くためにこの連載はあった。

おれと神さまはロザミアのいる謁見の間に向かった。

だが、途中、城の空中庭園で、リーゼが誰かと対峙しているのを見かけた。おれは

「神さま、回復魔法かけてやるよ」

といって、神さまの傷をなおした。

そして、

「神さまは急いで、ロザミアのところに向かってくれ。おれはリーゼを見てくる」

「わかったでござる」

神さまは元気になって走っていった。

おれは空中庭園のリーゼに会いに来た。リーゼが一人の老僧と睨みあっている。

「なんだ、その人は、リーゼ」

「救世主さま！」

リーゼが笑顔で喜んだ。だが、すぐに、険しい顔に変わる。

「見つけました。高位の魔道士です」

「何！」

おれは心臓が止まるかと思った。神をたぶらかすほどに高度な魔道士。それが、高位の魔道士。

いかに、おれでも、戦って勝てるとは限らない。どう話し合っべきか。

「この魔道士は、おれを元の世界に帰せるのか」

「おそろく」

リーゼが答えた。

「異世界へ行くつもりか。お主らのからくり、まだわたしにはわからぬ」

高位の魔道士が答えた。

「あなたは、善良ですか。悪人ですか？」
おれが聞くと、

「スニーク帝国に仕えておるのじゃ。悪人に決まっておろう。国を
売り渡した後じゃわ」

とても、信用できる相手ではなかった。

高位の魔道士が炎の魔術を使ってリーゼを攻撃した。

だが、リーゼには効かない。

「なんで戦っているんだ？」

「この魔道士は、めかけの命を狙っているのです」

なんだって。やばい。危険だ。おれの命だけでなく、リーゼの命
も危険だ。そして、この世界が危険だ。

「リーゼ、おれは元の世界に帰るのはあきらめるよ。この魔道士を
殺そう」

「本当によろしいのですか、救世主さま。少なくとも、生かしてお
かなければ、元の世界に帰る手段は、当分、見つからないと思いま
すが」

「いいよ、かまわないよ。こんな悪人に世界を任せられない。当然、
おれとリーゼの運命も任せられない」

「救世主さまがそれでよいなら、めかけが退治します」

魔道士は薄笑いを浮かべていった。

「このわしを倒すというが、簡単にできると思っているのかな。太
陽爆発」

なんだか、すごい高温で空中庭園が炎に包まれた。推定温度は、
数万度。文字通り、太陽の爆発に匹敵する威力だ。

だが、おれは無傷だし、リーゼも無傷だ。

「えい、ほかほかほかほか。リーゼが殴り倒すです」

リーゼが杖で魔道士を叩く。

「これ、やめないか。わしはもう体ががたがたおるのだ。あまり
先は長くない」

魔道士が泣き言をいう。

「高位の魔道士よ。あなたがスニーク帝国に身を売り渡したのはなぜです？」

おれが聞いてみた。

高位の魔道士は答えた。

「国を思い通りにたぶらかすのが楽しかったのじゃ。それだけじゃよ。負けるとわかっていているスニークに手を貸した。今では、勝てるわけのないバツシュ帝国がわしを襲っておる。皮肉なものじゃ」

「それならば、もう一度、心を入れ替えて、バツシュ帝国の宮廷魔道士になつてくれませんか。どうか、よろしくお願いします」

おれは頭を下げた。

「ふむ、降参しろというのだな。確かに、攻め込んでいた兵はわずかなようだが、スニーク帝国は負けている。帝都陥落は目前だ。敗残のスニーク帝国につくよりは、今再び、バツシュ帝国に仕えようかのう」

「それじゃあ」

「待つてください。あなたが生きて許されるには条件があります。

それは、めかけと救世主さまの仲を決して引き裂かないこと。催眠、死、遠隔追放、その他、どのような方法を使つても、めかけと救世主さまの仲を引き離すことを禁じます」

リーゼはきつくいった。

おれにはわからない。リーゼとこの高位の魔道士、いったい、どちらが強いのだろう。

高位の魔道士は深く考えてから答えた。

「お主たちのからくりはまだわたしにはわからん。だが、約束しよう。決して、お主たち二人を引き裂くことがないようにな」

「真実の精霊に誓え」

リーゼが真実の精霊というものを呼び出した。

高位の魔道士は、その高度な技に恐れを抱いたようだ。

「わかった。真実の精霊に誓おう」

そして、その高位の魔道士が、決して、おれとリーゼの仲を引き

離さないことで、契約が結ばれた。

「これでいいかな、リーゼ」

「はい。誓約を破れば、この魔道士の体は灰になります」

そして、高位の魔道士を仲間にして、おれたちは謁見の間を走った。

「ロザミアがいよいよ、スニーク皇帝と戦うはずだ。急ごう」

おれとリーゼは、謁見の間に急いだ。

ロザミアがスニーク皇帝と対峙している場面になんとか、おれは間に合った。

アイザと神さまが雑兵をばったばったと斬り倒している。

ロザミアは、剣をスニーク皇帝に向け、指しかざしたままだ。

「悪い。ロザミア、遅れた」

おれは慌てて、謁見の間に入った。

「来たか、まこと」

ロザミアが微笑んだ。眩しいくらい嬉しそうな笑顔だった。

「スニーク帝国皇帝よ、貴様の反乱は鎮圧されることとなった。大人しく首をさし出せ」

ロザミアがいう。

スニーク皇帝は、きらびやかな衣装を身にまとった装飾華美な男だった。

「この大陸は、八百年の長きに渡って、権威あるバツシュ帝国が治めてきた。それを反逆し、帝位を篡奪しようとした汝の罪は重い。逆徒よ、悔しければ、このロザミア・バツシュと、正々堂々の一対一の勝負をしろ。帝国の帝位を決めるのに、それぞれの皇帝同士が一騎討ちするのに、異存はあるまい。まさか、臆して逃げるなどということがあるまいな」

ロザミアが啖呵をきった。

スニーク皇帝は、悪い夢でも見ている気分だった。せつかく、バツシュ帝国を滅ぼして、スニーク帝国初代皇帝に即位したと思ったら、生きていたバツシュ帝国の末裔に反乱され、しかも、報告では負ける寸前だということではないか。

スニーク皇帝は、魔王が死んだと聞いた時点で、すでに戦意を喪失していた。

戦力は、スニーク帝国の圧倒的に不利だ。シュナイク將軍を殺し、

魔王を殺すような凄腕の集まりに勝てるわけがない。次元がちがうというものだ。

しかし、スニーク皇帝も考えた。

人生で一度も、一対一の戦いなどしたことがないが、もし、この女相手に勝てば、バツシユ帝国は崩壊し、スニーク帝国はまだまだつづくのではないか？

敵は女。恐れる必要はないのではないだろうか。

これは、むしろ、千歳一隅のチャンスなのではないだろうか。何をバカなことを。

「余はスニーク皇帝であるぞ。一対一の戦いなど、受ける義理はない。ものども、早く、ロザミア姫の首をとれ」

スニーク皇帝は怒声で命令した。

「しかし、陛下、我が軍の兵はほとんどが殺されるか、降伏しております。ここはやはり陛下みずから陣に立っていただきたいと」

スニーク帝国大臣が進言している。

「おい、スニーク皇帝。なぜ、バツシユ帝国に反乱するのに、魔族の力など借りたのじゃ。それがどれほどの愚策か、気づかなかったわけではない。魔族の力を借りて、帝国を支配しようという貴様らには、初めから勝ち目がなかったのじゃ」

ロザミアの叱責はつづく。

「魔族の力をなぜ、借りただと？ この平民に生まれたおれが皇帝になるには、魔族の力でも借りなければ不可能であろう。この平民生まれのおれにしてみれば、バツシユ帝国の皇族貴族を虐げたのは、無類の喜びであった」

スニーク皇帝が答えた。

「貴様、正気か。自分が魔族にただいいように利用されていただけだと知らないわけではあるまい。スニーク帝国領内で魔族に食われたという被害報告は千件を超えるのだぞ」

ロザミアは詰問して、追い詰める。

スニーク帝国皇帝は答えた。

「まだ子供だった頃な。余は平民であった。その時、魔族の友人ができた気がしたのだよ。それがすべての始まりで、スニーク帝国のすべてだ」

「その魔族の友人はどこにいるのかな？ スニーク皇帝」

「死んだのだよ。思えば、彼が死んでから、魔王が余に語りかけるようになった。思えば、あの時からすでに騙されていたのかもしれ
ない」

その発言に、スニークの役人は騒然となった。

「なんとということだ。我が皇帝は、魔王にたぶらかされていただけなのか？」

「とんでもないことだ。背信、背徳、売国奴のすることだぞ」

「おお、わたしは使える君をまちがえてしまった」

スニーク帝国の家臣にすでに皇帝への忠誠心はなかった。

「逆徒の夢をあきらめよ。わらわと一対一の勝負をせよ」

「そこまでいわれては、仕方あるまい」

スニーク皇帝が重い腰をあげた。

「決闘を受けよう、ロザミア姫」

スニーク皇帝が剣を抜いた。

スニーク皇帝は戦いにおいて、まるで素人だった。魔族を利用し、利用されるのが、彼の特技だったのだ。剣術は守備範囲外だ。

「逆徒スニーク皇帝の首を討ちとったり。この大陸は、今、再び、
バツシュ帝国がこれより統治することとする」

ロザミアが斬り倒したスニーク皇帝を、侮蔑の目で見ると、降伏するものを募り始めた。

わあああ、と大歓声があがって、バツシュ帝国に再忠誠を誓うもので、あふれ返った。

大混乱しているが、魔王が死んだことにより、すべての魔族は魔界へ引き上げた。

大陸はバツシュ帝国のものとなり、ロザミア・バツシュは中興の祖として歴史に名を刻む。

33 (後書き)

次回、最終回です。

次回はすごい短いかもしれません。

二日間は強行日程だった。

まだ、バツシユ帝国の政治を担う家臣たちも決まっていけないのに、ロザミアは戴冠の儀と婚礼の儀を続けざまに行った。

ロザミアは、少ない時間をつくって、信用できる人物に、帝国の家臣になってくれるように頼んでいたようだ。

家臣になる志願者は大勢いるのだが、その中から、有能な善人、少なくとも、無能な善人を選ぶのがロザミアの仕事だった。

アイザは近衛兵長になるものと思っていたが、ロザミアがそれに反対し、皇帝直属軍というものが新設され、おれとリーゼとアイザと神さまの四人だけで編成された。おれたちの地位はそこに落ち着いたらしい。

ロザミア戴冠の儀。

大観衆の前で、神官に冠をのせてもらい、後はパレードをして、表向きの儀式は終わった。裏の儀式というものがあり、神官がロザミアの背中の中の文字を見ることだった。

「おお、あなたはまさしくまちがいに、皇帝の血を引くものだ」
神官は涙を流して感動していた。

ちなみに、おれたち直属軍も付き添っていたのである。

その日の夜、おれはリーゼの寝室を訪れた。

「なんですか、救世主さま」

眠たそうなりーゼの声が返ってきた。

「一人か、リーゼ？」

「ええ、宮殿では個室を与えられてますけど」

「そのなんだ。明日、ロザミアとおれ、婚礼の儀をするじゃない？
それで、明日、初夜を迎えることになると思っただけど、その前に、初めてはやっぱりリーゼがいいかなと思って」

「まあ、救世主さま」

リーゼは身をよじらせて喜んでいる。

「救世主さまは、明日、めかけとロザミア様も婚礼の儀を行うことを死んでおいでですよね」

「ああ、知っているが」

「アイザも婚礼の儀を結びます」

「そうだな」

「神さまは相変わらず一人ですけど」

「うん、そのうち、神さまのお相手も探してあげよう」

「それがいいです」

リーゼは喜んだ。

「それで、明日がどんな初夜になるのか、ご存知なのに、今日、めかけを訪れたのですか」

「そうだよ、リーゼ」

「うふふふ。いいですよ。特別に中に入ってください、救世主さま。そして、おれはリーゼと一夜をすごした。とても幸せな一日だった。」

次の日は、婚礼の儀。

「ロザミア、汝は病める時も健やかなる時も、変わらずまことを愛すると誓いますか」

ウェディングドレスのロザミアは純白に金髪で美しい。

「はい、誓います」

「まこと、汝は病める時も健やかなる時も、変わらずロザミアを愛すると誓いますか」

「はい、誓います」

「リーゼ、汝は病める時も健やかなる時も、変わらずロザミアを愛すると誓いますか」

「はい、誓います」

「アイザ、汝は病める時も健やかなる時も、変わらずロザミアを愛すると誓いますか」

「はい、誓います」

四人の一斉結婚。ロザミアが男一人と、女二人と結婚したことは、ものすごい巷で話題になったらしいが、おれたちは、最初の初夜をすごすので精一杯だった。

この日の夜は、人生でいちばん幸せな日だったとロザミアは語った。

34 (後書き)

ありがとうございます。

作者が初めて挑んだ本格異世界ファンタジー

これで完結です。

連載して公開するの、初めてだったんですね。

この後書き書いてる今は17日ですけど、毎日更新を

果たして、なんとか、電撃大賞に応募できるくらいの量で

完成しました。

とりあえず、続編の予定はないですが、いろいろと、

続編を書いて書けないわけでもない終わらせ方にしてあります。

高位の魔道士とか、残ったままですしね。

何にせよ、非常に連載は疲れました。締め切りの重圧がすごくて。

時々、精神不安になってましたよ。

でも、それを乗りこえないと、長編は完成しないんですね。

最後に、この作品を読んでくれる人すべてに感謝を。

特に、作品の構想に困った時に相談にのってくれた名無しさんには、

特別の感謝を捧げます。

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6603s/>

気づかれぬままに神性の交換が行われた

2011年9月15日21時40分発行